

金森修教授 研究業績一覽

稲田 祐 貴

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

金森修先生の追悼企画にあたって

金森修先生が亡くなられて早くも一年が経過しようとしていますが、その影響はむしろ深く広くじわじわと浸透してきているように感じられます。実際、未刊行の書籍の編纂が行われるなど、金森先生の遺志を継ごうという努力が続けられています。本企画は、没後まもなく小国喜弘教授からなされた提案、「先生が遺された多くの書籍を改めて拝読することを通して、心の中の対話を先生と続けていきたいと思えます」（『研究室紀要』42号、巻頭の辞）を受けて、大学院ゼミの関係者を中心に会合を持ち、立案に至りました。

企画は三部から構成されます。

第一部には、同僚であった先生方を代表して佐藤学先生より、7月20日に行われたお別れの会での追悼文を基にした原稿をお寄せいただきました。金森先生のご業績や教育学研究科でのご活躍の一端を鮮やかによみがえらせています。

第二部は、業績一覧や大学院ゼミの記録、蔵書整理の経過をまとめています。業績一覧はウェブ上

には公開されていなかったお仕事を含め、現時点で網羅的なものとなるよう作成しました。蔵書については、金森先生のご遺志を生かして、広い分野の書籍、特に日本では参照しにくいフランス語関係の書籍の扱いが検討されました。図書館での受け入れのための準備作業など、一つの事例として参照できるよう記録を残すようにしました。

第三部は、「心の中の対話」の発露としてのレビューや思い出の文章からなります。できるだけ広範囲の金森ゼミの関係者から原稿を寄せていただきました。限られた条件下で進行した企画であり至らない点もありますが、金森先生の学問の広がりや倫理性、後進への期待や気遣いを感じ取っていただければと考えます。なお有益なご助言をいただいた小国先生、片山勝茂先生に深謝申し上げます。

稲田祐貴（大学院博士課程）

奥村大介（東京大学特任研究員）

山田俊弘（教育学研究員）

金森さんへの追悼のスピーチ

佐 藤 学

このような場で、金森さんについてお話ししなければならぬことの無念さをまずお伝えしなければなりません。5月26日に訃報を聞いたときは愕然たる思いで、言葉を失ってしまいました。私は東京大学で5年前まで一緒に努めた同僚でしたが、私の退職直後に、金森さんは闘病生活に入られました。その5年間、厳しい日々の中で想像を絶するほどの多くの貴重な仕事を達成されたことに心からの敬意を表している次第です。

ふり返ってみますと、金森さんは、この写真で見られるように、いつもはにかみを含んだ笑顔と理智的な額、それに茶目っ気のある眼、この三つが同居していました。それらがそのまま金森さんの人柄だったと思います。

金森さんと私との出会いは、ここにも参加されている東京水産大学(当時)の小松美彦さんに取り持っていただきました。今から18年前ですが、岩波書店の『思想』で栗原彬先生と私が編集責任者となって「公共圏の政治学」という特集を組みました。その編集会議で金森さんと出会ったのです。もちろん、それまでに金森さんの著書や論文は読んでいました。特に『バシュラール』を読んだときは驚愕しました。バシュラールというと、生きとし生けるものを煌めく比喩で表現する詩学の哲学者と思い込んでいたのです。そのバシュラールから金森さんはその根底にある科学思想を引き出してこられた。これが驚愕であったわけです。

それ以前に読んだ金森さんの印象深い論文があって、橋田邦彦に関する研究です。われわれ教育学の人間にとって橋田邦彦は、科学者ではあったけれど戦時下の文部大臣で最大の戦争責任者の一人であって、私自身もそう認識していました。ところが金森さんは、その橋田の中に生命の倫理と科学思想における身体論の先駆性を読み取っていて、これも驚愕であると同時に、その若々しい論文の論旨に納得せざるをえなかったわけです。

これらの金森さんの研究に一貫するものとして私

は、「コナトゥス」の思想があると認識し、そこから多くを学んできました。「コナトゥス」とは西洋哲学の根底に流れていて「生命体の生きる意志」を意味しています。金森さんの生命倫理、生命哲学、そして科学思想の根底に、この「コナトゥス」の思想が息づいていたことを今更ながらに思うのです。

それ以来、金森さんとは縁があって東京大学大学院教育学研究科で同僚となり共に歩んできたわけですが、その一番の思い出は、東京大学に赴任された最初の年の大学院生歓迎会のときの金森さんのメッセージです。「皆さんは自由に生きていると思うでしょう。しかし、最も自由に生きるためには自分から自由にならなければいけない。そして自分から自由になるためには学問を学ばなければならないんです。」そう、おっしゃった。これは私にとっても衝撃的なメッセージでした。自由という思想を深く深く問い直した瞬間でした。

それと併せて思い出すことがあります。人文・社会科学の振興が現在も話題になっていますが、10年ほど前、日本学術振興会が石井紫郎会長のもとで人文・社会科学振興プロジェクトを発足させて、その発足の会議の講演者として私が金森さんを推薦しました。その講演を聞きながら、石井先生がくっくっとお笑いになりながら、「金森さんは駒場の比較文化の出身じゃないのか」と私に問われるので、「そうですよ」とお答えすると、「まるっきし教養の比較文化だよ」とお笑いになる。もちろん肯定的な笑いなのですが、石井先生が直観されたように、金森さんは自由人であったし、自由において原理主義的であったと思います。

晩年の金森さんは、畏敬すべき存在でした。これだけの著書を著され、しかも金森さんの独自性、ユニークネスというものを説得的に展開されてきた。しかも厳しい闘病生活の中で、そのユニークネスの集大成を一気に花咲かせておられる。この力がどこから来ているのかというと、生きることに対する無条件の肯定感がそれを支えているように思います。

それこそが金森さんの自由主義の根源であり、科学的合理主義の根源にあったと思うのです。

私は金森さんが亡くなられたときに、スピノザの「コナトゥス」の思想を思い起こしました。生きとし生けるものの存在が、そのまま認められる思想、その生命が無条件で尊重されるべきであるという思想、それこそが人間の合理的思考の根源であるという思想、これこそが「コナトゥス」の思想です。金森さんは自らの生を賭けて、この思想を実践されたのだと思います。金森さんが死を賭けて「コナトゥ

ス」の思想を一貫されたことは全く無念と言わざるをえません。生命を最も尊重し、生命を最も肯定し、その意味を最も解き明かした方が、こんなに早く亡くなられたことは、まったく不条理であり不合理です。この不条理と不合理を私たちは引き継いで、これからの研究生活に生かしていきたいと思います。

金森さん、ありがとう。

(東京大学名誉教授・学習院大学教授)

金森修教授 研究業績一覧

単著

- 1) 『フランス科学認識論の系譜——カンギレム、ダゴニエ、フーコー』 勁草書房、1994年（第12回渋沢・クローデル賞受賞）
- 2) 『バシュラール——科学と詩』講談社、1996年（翻訳：『巴什拉』武青艶・包国光訳、河北教育出版社、2002年）
- 3) 『サイエンス・ウォーズ』 東京大学出版会、2000年、新装版、2014年（第26回山崎賞・第22回サントリー学芸賞受賞）
- 4) 『負の生命論』 勁草書房、2003年
- 5) 『ベルクソン』 NHK出版、2003年
- 6) 『自然主義の臨界』 勁草書房、2004年
- 7) 『科学的思考の考古学』 人文書院、2004年
- 8) 『遺伝子改造』 勁草書房、2005年
- 9) 『病魔という悪の物語——チフスのメアリー』 ちくまプリマー新書、2006年
- 10) 『〈生政治〉の哲学』 ミネルヴァ書房、2010年（第8回日本医学哲学・倫理学会 学会賞）
- 11) 『ゴーレムの生命論』 平凡社新書、2010年
- 12) 『動物に魂はあるのか』 中公新書、2012年
- 13) 『科学の危機』 集英社新書、2015年
- 14) 『知識の政治学』 せりか書房、2015年
- 15) 『科学思想史の哲学』 岩波書店、2015年
- 16) 『人形論』（仮題） 平凡社、2017年刊行予定

共著

- 1) 『現代科学論』 金森修、井山弘幸著、新曜社、2000年
- 2) 『遺伝子改造社会 あなたはどうする』 金森修、池田清彦著、洋泉社新書、2001年

編著

- 1) 『エピステモロジーの現在』 慶應義塾大学出版会、2008年

- 2) 『科学思想史』 勁草書房、2010年
- 3) 『昭和前期の科学思想史』 勁草書房、2011年（翻訳： *Essays on the History of Scientific Thought in Modern Japan*, Translated by Christopher Carr and M. G. Sheftall, Japan Publishing Industry Foundation for Culture, 2016）
- 4) 『合理性の考古学』 東京大学出版会、2012年
- 5) 『エピステモロジー——20世紀のフランス科学思想史』 慶應義塾大学出版会、2013年
- 6) 『昭和後期の科学思想史』 勁草書房、2016年
- 7) 『明治・大正期の科学思想史』 勁草書房、2017年刊行予定

共編著

- 1) 『科学論の現在』 金森修・中島秀人、勁草書房、2002年
- 2) 『VOL 05 特集：エピステモロジー』 金森修・近藤和敬・森元斎、以文社、2011年
- 3) 『生命倫理のフロンティア』 栗屋剛・金森修、丸善出版、2013年
- 4) 『科学技術をめぐる抗争』 リーディングス戦後日本の思想水脈第3巻、金森修、塚原東吾、岩波書店、2016年

分担執筆

- 1) 「自己言及からの逃亡——ゾラの『バスカル博士』」 『フランス文化のこころ——その言語と文学』 駿河台出版社、1993年
- 2) 「征服と消滅——ゾラにおける宗教性の戯画」 山形和美編 『聖なるものと想像力』 下巻、彩流社、1994年
- 3) Article “Kato” (加藤弘之論) *Dictionnaire du Darwinisme et de l'Évolution*, F-N, Paris, P.U. F., janv. 1996
- 4) Article “Oka” (丘浅次郎論) *Dictionnaire du Darwinisme et de l'Évolution*, O-Z, Paris, P.U.

- F., janv. 1996
- 5) 「生物学から生命論へ」『講座生命'97』vol. 2, 哲学書房、1997年
 - 6) 「バフチンとフロイト」『バフチンを読む』日本放送出版協会、1997年
 - 7) “A Discursive Sphère of Self-référential Zone of Cultural Anthropology. Essay on P. Rabinow” *ISLA 1, Philosophical Design for a Socio-Cultural Transformation*, Nov. 1998, E.H. E.S.C., Rowman & Littlefield
 - 8) “Réception de Bachelard au Japon” *Bachelard dans le Monde*, Sous la direction de Jean Gayon & Jean-Jacques Wunenburger, Paris, P. U.F., 2000
 - 9) 「国家と産業と科学の結合——現代科学へ」榊山紘一・坂部恵・古井由吉・山田慶児・養老孟司・米沢富美子編『20世紀の定義 5 新コペルニクスの転回』岩波書店、2001年
 - 10) “Bio-pouvoir et Ingénierie Sociale au Japon”, *Michel Foucault et la Médecine*, Sous la direction de Philippe Artieres et Emmanuel da Silva, Paris, Éditions Kime, juillet, 2001
 - 11) 「遺伝学的人間観とその教育学的射程」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学年報 8 子ども問題』世織書房、2001年
 - 12) 「科学知識の社会学」金森修・中島秀人共編『科学論の現在』勁草書房、2002年
 - 13) 「科学のカルチュラル・スタディーズ」金森修・中島秀人共編『科学論の現在』勁草書房、2002年
 - 14) 「科学と超域の世界——『科学の自律性』の融解」坂本百大・野本和幸編著『科学哲学——現代哲学の転回』北樹出版、2002年
 - 15) 「概念史から見た生命科学」廣野喜幸・市野川容孝・林真理編『生命科学の近現代史』勁草書房、2002年
 - 16) 「場の自律性と社会学」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力』、藤原書店、2003年
 - 17) “Risques et malaises” Jocelyne Perard et Maryvonne Perrot, sous la direction de, *L'Homme et l'Environnement*, Actes du colloque organise a Dijon du 16 au 18 novembre 2000, Université de Bourgogne, 2003
 - 18) 「PVS 患者の生と死」桑子敏雄編『いのちの倫理学』コロナ社、2004年
 - 19) 「場所のころろ」『環境心理学の新しいかたち』第2章、誠信書房、2006年
 - 20) 「装甲するピオス」『身体をめぐるレッスン』第3巻、岩波書店、2007年
 - 21) 「エピステモロジー」『哲学の歴史』第11巻、中央公論新社、2007年
 - 22) 「人とヒト——パーソン論の視座を通して」野家啓一編『ヒトと人のあいだ』ヒトの科学第6巻、岩波書店、2007年
 - 23) 「〈認識の非自然性〉を頌えて」岩波講座哲学第4巻『知識 / 情報の哲学』岩波書店、2008年
 - 24) 「序論：現代フランスの主知主義的伝統」金森修編『エピステモロジーの現在』慶應義塾大学出版会、2008年
 - 25) 「〈科学思想史〉の哲学」金森修編『科学思想史』勁草書房、2010年
 - 26) 「エピステモロジーに政治性はあるのか?」+ 「福島第一原発の事故に寄せて」金森修・近藤和敬・森元斎編『VOL 05 特集：エピステモロジー』以文社、2011年
 - 27) 「G・バシュラール『科学的精神の形成』：あまりに鮮やかな間違いの群れ」『科学』編集部編『科学者の本棚』岩波書店、2011年
 - 28) 「〈科学思想史〉の来歴と肖像」金森修編『昭和前期の科学思想史』勁草書房、2011年
 - 29) 「第二部 4：1985-2007年 ポスト近代の到来」『思想』編集部編『『思想』の軌跡——1921-2011』岩波書店、2012年
 - 30) “Fixation de l’instantanéité de la forme” Shin Abiko, Hisashi Fujita & Naoki Sugiyama eds., *Disséminations de L'évolution créatrice de Bergson*, Olms, coll. “Europaea memoria”, 2012
 - 31) 「〈放射能国家〉の生政治」檜垣立哉編『生命と倫理の原理論』大阪大学出版会、2012年
 - 32) 「システムの信用失墜と機能不全」藤原書店編集部編『3・11と私』、2012年
 - 33) 「〈動物靈魂論〉の境位——或る言説空間の衰退と消滅」金森修編『合理性の考古学』、東京大学出版会、2012年
 - 34) 「愛するゴーレム」大場昌子・佐川和茂・坂野明子・伊達雅彦編『ゴーレムの表象』南雲堂、2013年
 - 35) 「序論〈客観性の政治学〉」、『解題』金森修編『エピステモロジー——二〇世紀のフランス科学思想

- 史』慶應義塾大学出版会、2013年
- 36) 「虚構に照射される生命倫理」栗屋剛・金森修編『生命倫理のフロンティア』丸善出版、2013年
- 37) 「失われた輝きを求めて 安部公房『他人の顔』、
「しびれるような読後感にため息 ヘンリー・ミラー『南回帰線』」東京大学新聞社編『東大教師 青春の一冊』信山社新書、2013年
- 38) 「『人間の尊厳』は解体すべき概念か——動物・理性・靈魂」小松美彦『生を肯定する』青土社、2013年
- 39) 「生命とリスク」たばこ総合研究センター『談100号記念論集』水曜社、2014年
- 40) “The biopolitics of contemporary Japanese society” 法政大学国際日本学研究所編『受容と抵抗』国際日本学研究所叢書22、2015年
- 41) 「フレネの教育思想」橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想』東信堂、2015年
- 42) 「カリキュラム・ポリシーと社会」東京大学カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション』東京大学出版会、2015年
- 43) 「限界体験の傷口——〈原爆文学〉と原発事故」内田隆三編『現代社会と人間への問い』せりか書房、2015年

論文

- 1) 「火の化学」『言語文化論集』第24号、1988年
- 2) 「カメレオンの情操」『比較文学研究』第53号、1988年
- 3) 「バシユラルと化学」(1)~(6)：(1)『言語文化論集』第26号、1988年、(2)『言語文化論集』第27号、1988年、(3)『言語文化論集』第28号、1989年、(4)『言語文化論集』第29号、1989年、(5)『言語文化論集』第30号、1989年、(6)『言語文化論集』第31号、1990年
- 4) 「分析への認識論的障害」『化学史研究』通巻44号、1988年
- 5) 「物質的想像力論とその自己喪失」『言語文化の理論的・実践的研究』（現代語・現代文化化学系島利雄編）、1990年
- 6) 「化学認識の言語束縛性」『化学史研究』通巻57号、1992年
- 7) 「M・フーコー——近代と〈危険人物〉」『情況』1992年3月号
- 8) 「冗長な自然と冗長な宇宙——ロジェ・カイヨワ論」『言語文化論集』第35号、1992年
- 9) 「カンギレムにおける生命と機械」『現代思想』vol.20、no.8、1992年
- 10) 「M・フーコーのトポグラフィー」『言語文化論集』第36号、1992年
- 11) 「固定と俯瞰——F・ダゴニエにおける〈風景〉」『現代思想』vol.20、no.9、1992年
- 12) 「G・カンギレムにおける生命論的技術論」『科学基礎論研究』第79号、vol.21、no.1、1992年
- 13) 「粘稠なる浮動性——葉の認識論」『イマーゴ』1993年1月号
- 14) 「生命と美的創造理論との交錯——カンギレムとアラン」『言語文化論集』第37号、1993年
- 15) 「主体性の環境理論とその倫理的射程」『応用倫理学研究』加藤尚武・飯田亘之編集、千葉大学教養部倫理学研究室編、1993年
- 16) 「コントにおける生物学」『自然哲学研究』第7号、1993年
- 17) 「記憶と遺伝——概念の奇形学のために」『現代思想』1993年10月号
- 18) 「コントと生物学者たち」『科学史研究』第二期、第33巻、no.189、1994年
- 19) 「消化器系の唯物論——パリ学派をめぐる思想的挿話」『言語文化論集』第38号、1994年
- 20) 「擬人主義の認識論」『生物学史研究』第58号、1994年
- 21) 「真理生産の法廷、戦場——そして劇場」『情況』1994年6月号
- 22) 「刺激感応性の概念史素描」『現代思想』vol.22、no.9、1994年
- 23) 「ベルクソンと進化論」『現代思想』vol.22、no.11、1994年
- 24) “Une Philosophie de l'Approximation”『自然哲学研究』第八号、1994年
- 25) “Une Épistémologie de l'Instrument chez G. Bachelard”, *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, vol.8. no.5, 1995
- 26) “Portrait d'un Penseur Bouddhique a l'Age des Lumières de Meiji — Le Cas Inoue Enryō —”『言語文化論集』第40号、1995年
- 27) 「物質との対話の想起のために」『バフチンを考える』、筑波大学現代語・現代文化化学系学内プロジェクト報告書、1995年

- 28) “La Normalisation du Savoir Normatif —Autour de Hayashi Razan—” *EBISU*, no.9, 1995年
- 29) 「内も外もない世界へ」『情況』1995年6月号
- 30) 「科学主義者の生物学」『現代思想』vol.23, no.13, 1995年
- 31) “La matrice négative de l’orthodoxie néo-confucianiste japonaise— Le cas Hayashi Razan” 『言語文化論集』41号、1995年
- 32) 「化学物質の産婆術」『ユリイカ』1995年12月号
- 33) 「ホモ・ホリビリス」『現代思想』vol.24, no.2, 1996年
- 34) 「科学の人類学——ブルーノ・ラトゥール試論」『現代思想』vol.24, no.6, 1996年
- 35) “Portrait d’un Paysan ‘Réformateur’ dans la Société Féodale au Japon —Le Cas Ninomiya Sontoku—” *EBISU*, no.14, 1996
- 36) 「私鏡という破片」『情況』1997年3月号
- 37) 「われら、快楽を知らぬ者たちのために」『現代思想』、vol.25, no.3, 1997年
- 38) 「橋田邦彦の生動と隘路」『年報 科学・技術・社会』vol.6, 1997年
- 39) “The Politics of Pharmacological Human Designing” *iichiko intercultural*, no.9, 1997
- 40) 「状況と場所」『情況』1997年11月号
- 41) 「サイエンス・ウォーズ」『現代思想』vol.26, no.9, 1998年、『現代思想』vol.26, no.10, 1998年
- 42) 「技術的環境構成の果てに」『季刊iichiko』no.48, 1998年
- 43) 「遺伝子研究の知識政治学的分析に向けて」『現代思想』vol.26, no.11, 1998年
- 44) 「普遍性のバックラッシュ」『現代思想』vol.26, no.13, 1998年
- 45) 「環境の文化政治学に向けて」『科学』vol.69, no.3, 1999年
- 46) 「エコ・ウォーズ」『現代思想』vol.27, no.9, 1999年
- 47) 「健康という名の規範」『科学哲学』vol.32, no.2, 1999年
- 48) 「『科学的』とは何か」『科学基礎論研究』vol.27, no.1, 1999年
- 49) 「生殖のバイオポリティクス」『思想』no.908, 2000年
- 50) 「遺伝子改良の論理と倫理」『現代思想』vol.28, no.10, 2000年
- 51) 「設計的生命観の射程」『環境情報科学』第30巻第1号、2001年
- 52) 「タスキギー梅毒研究の射程」『科学医学資料研究』第29巻第4号、2001年
- 53) 「遺伝子改造社会のメタ倫理学」『現代思想』vol.29, no.10, 2001年
- 54) 「リスク論の文化政治学」『情況』2002年1・2月号
- 55) 「漏れた心、溜まる場所」『感性哲学』no.2, 2002年
- 56) 「汚れた知——タスキギー研究の科学と文化」『負の生命論』勁草書房、2003年
- 57) “Science Wars and Japanese Postmodernism” *Korean Journal for the Philosophy of Science*, vol.6, no.1, 2003
- 58) 「リベラル新優生学と設計的生命観」『現代思想』vol.31, no.9, 2003年
- 59) “Philosophy of Genetic Life Designing” *Jahrbuch fur Bildungs-und Erziehungsphilosophie*, 5, 2003
- 60) 「摂食障害という文化」『思想』no.958, 2004年
- 61) “Cultural Morphology of Eating Disorders” 『医史学』、大韓医史学会誌、*Korean Journal of Medical History*, vol.13, no.1, 2004
- 62) 「医学的一元論者の肖像」『科学的思考の考古学』第2部第1章、人文書院、2004年
- 63) 「生氣論の運命」『科学的思考の考古学』第2部第4章、人文書院、2004年
- 64) 「仮想世界の遺伝学」『科学的思考の考古学』第2部第5章、人文書院、2004年
- 65) “Cultural Attendance on Homo Geneticus” *Journal of International Biotechnology Law*, vol.2, no.1, 2005
- 66) 「設計の自己反射・離陸する身体」『現代思想』vol.33, no.8, 2005年
- 67) “The Problem of Vitalism Revisited” *Angelaki*, vol.10, no.2, 2005
- 68) 「生命倫理学——ヤヌスの肖像」『思想』no.977, 2005年
- 69) “Lingering Dawn of Homo Transgeneticus” *Journal of ELSI Studies*, vol.3, no.2, 2005
- 70) 「科学思想史へのオマージュ」『季刊iichiko』no.89, 2006年

- 71) 「血液循環の認識論」『フランス哲学・思想研究』no.11、2006年
- 72) 「遺伝子改造の倫理と教育思想」『近代教育フォーラム』第15号、2006年
- 73) “Bios and his Self-armor” *Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, No.2, 2007
- 74) 「『創造的進化』と〈生命の形而上学〉」『哲学と現代』第23号、2007年
- 75) 「ビオスの本源的装甲」『生命倫理』vol.17、no.1、2007年
- 76) “Shimomura Torataro et sa vision de la machine” *EBISU*, no.40-41, 2008-2009
- 77) “L’Évolution creatrice et le neolamarckisme” Arnaud François ed., *L’Évolution créatrice de Bergson*, Paris: Vrin, Septembre 2010
- 78) 「病と死の傍の賢治」『死生学研究』、「東アジアの死生学へ」東京大学大学院人文社会系研究科、2010年（翻訳：「病與死旁的賢治」『東亞生死學』2010）
- 79) 「〈人文知〉の不可還元性のために」『研究室紀要』（東京大学大学院教育学研究科・基礎教育学研究室）、第37号、2011年
- 80) “After the Catastrophe— Rethinking the Possibility of Breaking with Nuclear Power” *Peace from Disasters*, Proceedings of HiPec International Peacebuilding Conference 2011, September 18-19, 2011, Hiroshima International Conference Hall.
- 81) 「科学技術と環境倫理」『環境情報科学』vol.40、no.3、2011年
- 82) 「公共性の黄昏」『現代思想』vol.39、no.18、2011年
- 83) 「自律的市民の〈叛乱〉のために」『Kototoi』vol.002、2012年
- 84) 「合成生物の〈生政治学〉」『思想』岩波書店、no.1066、2013年
- 85) 「医療倫理の〈事務化〉に抗して」日本蘇生学会編『蘇生』第32巻第1号、2013年
- 86) 「認識論とその外部——汚染と交歓」日本哲学会編『哲学』第64号、2013年
- 87) 「3.11の科学思想史的含意」サントリー文化財団・アステイオン編集委員会編『アステイオン』第78号、2013年
- 88) 「専門知と教養知の境域」『近代教育フォーラム』第22号、2013年
- 89) 「〈変質した科学〉の時代の宗教」『宗教研究』第87巻、377 第2輯、2013年
- 90) “Une lecture matérielle d’un poète japonais: Kenji Miyazawa” *Revue de Synthèse*, Tome 134, 6e série, No.3, 2013
- 91) 「〈理性〉という砦」+2014年春季研究大会シンポジウム・イントロダクション、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第19号、2014年
- 92) 「生命の価値」『臨床麻酔』vol.38、no.9、2014年
- 93) 「〈人間の尊厳〉概念の超越的性格の根源性」『生命倫理』vol.24、No.1、通巻25号、2014年
- 94) 「死・臨死を巡るアメリカ生命倫理学の歴史」『麻酔』第63巻、2014年
- 95) 「〈自発的隷従〉の回避へ」『iichiko』No.125、2015年

翻訳

- 1) サミュエル・ピング編『芸術の日本』美術公論社、分担訳、1981年
- 2) M・サンドライユ他著『病の文化史』1984年
- 3) F・ダゴニエ『具象空間の認識論』法政大学出版局、1987年
- 4) G・カンギレム『反射概念の形成』法政大学出版局、1988年
- 5) C・ベルナルル『動植物に共通する生命現象』朝日出版社、共訳、1989年
- 6) G・バシュラール『適応合理主義』国文社、1989年
- 7) F・ダゴニエ『面・表面・界面』法政大学出版局、1990年
- 8) G・カンギレム『科学史・科学哲学研究』法政大学出版局、監訳、1991年
- 9) F・ダゴニエ『バイオエシックス』法政大学出版局、共訳、1992年
- 10) G・ガッティング『理性の考古学——フーコーと科学思想史』産業図書、共訳、1992年
- 11) F・ダゴニエ『病気の哲学のために』産業図書、個人訳、1998年
- 12) ロシュディ・ラーシェド「科学史——科学認識論と歴史との狭間で」『みすず』第460号、1999年

- 13) 『ミシェル・フーコー思想集成』：「アレクサンドル・コイレ『天文学革命、コペルニクス、ケプラー、ボレリ』、『狂気、精神分析、精神医学』、筑摩書房、1998年、「ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズはニーチェにその本当の顔を返したがつている」、「哲学者とは何か」、「メッセージあるいは雑音?」『文学、言語、エピステモロジー』、筑摩書房、1999年、「F・ダゴニエの論考『生物学史におけるキュヴィエの位置づけ』に関する論考」、「生物学史におけるキュヴィエの位置」『歴史学、系譜学、考古学』、筑摩書房、1999年
- 14) スーザン・ホルド「イデオロギーとしての飢え」『思想』第946号、共訳、2003年
- 15) H・トリストラム・エンゲルハート「医学哲学」『生命倫理百科事典』第3版、volume I、丸善、2007年
- 16) Introduction, pp.391-398 et Traduction d'un texte de Omori Shozo, "Le passe et le rêve en tant que fabrication langagière", pp.398-421, Dalissier, M., S.Nagai et Y.Sugimura, sous la direction de, *Philosophie Japonaise*, Paris, J. Vrin, 2013
- 8) 「こんな大学になったらうれしい」『筑波フォーラム』no.35、1992年
- 9) 「新たな自然哲学の形成に向けて」『現代思想』1992年11月号
- 10) 『現象学事典』木田元他編集、弘文堂、1994年、項目：バシュラール、空間の詩学、合理的唯物論
- 11) 「近似的認識の価値について」『光陰』比較文化学類通信、第六号、1994年
- 12) 「フーコー」『哲学がわかる』Aera mook, no.6、朝日新聞社、1995年、『新版 哲学がわかる』Aera mook、朝日新聞社、2003年
- 13) 「〈後の見えない治療〉という不安——ブーヴレスを巡って」『季刊 iichiko』、no.36、1995年
- 14) 「インタビュー：ジャック・ブーヴレス氏に聞く」『週刊読書人』第2094号、1995年7月28日
- 15) 「装置としての生物」『青淵』第559号、1995年
- 16) 「『フランス科学認識論の系譜』について」『日仏会館通信』no.76、janv.、1996年
- 17) 「文科系と理科系との架橋」『出版ニュース』出版ニュース社、1996年12月下旬号
- 18) 読書日録上「影響を受けた本?」『週刊読書人』第2173号、1997年2月21日、読書日録中「涼やかな論敵君のために」『週刊読書人』第2174号、1997年2月28日、読書日録下「辞書への弁証法」『週刊読書人』第2175号、1997年3月7日
- 19) 『十勝毎日新聞』「十勝の場所の意志に学ぶ16」、1997年9月14日、「『気まぐれ』の存在論」、1997年9月19日、「漏れる心、溜まる場所」、1997年9月26日
- 20) 「不器用な自分探し」『わが道を歩む』茨城編(上)、文教図書出版、1997年
- 21) 「薬と、人間設計の政治学」『日仏薬学会Correspondance』、vol.5、no.2、janv. 1998年
- 22) 『社会学文献事典』、弘文堂、見田宗介他編集、1998年、項目：バシュラール『科学的精神の形成』、バシュラール『空間の詩学』
- 23) 「自然と人工という対立の彼方で」バシュラール『否定の哲学』解説、白水社、1998年
- 24) 『哲学・思想事典』子安他編集、岩波書店、1998年、項目：バシュラール、カンギレム、エピステモロジー、条件反射、ウィリス
- 25) 「知識政治学による人類学の再分節化に向けて」『IDOLA科学史・科学哲学』第14号、1988年

参考論文・エッセイなど

- 1) “Esquisse de l'épistémologie de Gaston Bachelard”, D.E.A de l'Université de Paris I, パリ第一大学D.E.A.論文、1982年
- 2) Étude sur l'épistémologie de Gaston Bachelard, Thèse de doctorat de troisième cycle pour l'Université de Paris I (Thèse dactylographiée)、パリ第一大学哲学博士学位請求論文、1984年10月提出、1985年1月22日受領
- 3) 由良君美監修『世界のオカルト文学』自由国民社、1985年、項目：ユルスナール、ウィルソン、マンディアルグ、バルザック、イェンセン、ディドロ
- 4) “Le traducteur indépendant au Japon”, *META*, vol 3, no.1, 1988
- 5) 「カンギレム、グランジェ紹介」『理想』第645号、1990年
- 6) 「戦争を巡る考察」『人間の生き方の探求』鈴木博雄編、図書文化社、1991年
- 7) 「フーコーの言説概念」『談話研究の諸相』（現代語・現代文化学系斎藤武生編）、1992年

- 26) 「ジョフロワ・サン＝ティレール論」『科学史フォーラム』no.1, 国際基督教大学キリスト教と文化研究所、1998年
- 27) 『クロニク二〇世紀人物史』講談社、1998年、項目：ベルクソン、バシュラル、バタイユ、メルロ・ポンティ、フーコー、バルト、デリダ、ドゥルーズ・ガタリ、アルチュセール
- 28) 『フランス哲学・思想事典』弘文堂、1999年、項目：バシュラル、カンギレム、ダゴニエ、18世紀エピステモロジーの系譜、ブランシュヴィック、ロトマン、タンヌリ
- 29) 「場所と環境の思想に向けて」『岐阜を考える』no.100、1999年
- 30) 「物に論宣言——エアロジェルの想像的読解を契機にして」『SD』第9905号、1999年5月号
- 31) 「フランスのウィトゲンシュタイン研究」『ウィトゲンシュタインの知88』野家啓一編、新書館、1999年
- 32) 「科学をめぐる戦争」日本学会会議編『学術の動向』1999年
- 33) “The logic of intervention in knowledge production” *Social Epistemology*, vol.13, no.3/4, 1999
- 34) 十勝環境ラボラトリー『まちづくり・ひとづくり提言集』vol.1、2000年
- 35) 「科学を見ると時代がわかる」(養老孟司氏との対談)『日経サイエンス』2000年
- 36) 「科学論・生命論」[科学的知識の社会構成主義]「サイエンス・スタディーズ1950-2000」(野家啓一氏との対談)『現代思想』vol.28, no.3, 2000年
- 37) 「社会的認識論と生命科学」『20世紀の生命科学と生命観』総合研究大学院大学、2000年
- 38) 「科学者と科学論者の戦争」『新分野開拓 '99』総合研究大学院大学、2000年
- 39) 樺山紘一編『新・社会人の基礎知識101』新書館、2000年、分担執筆、項目：「テクノロジーの未来像」「科学と人間倫理」「技術の国際競争」「臓器移植と人工臓器」
- 40) マイクロソフト『エンカルタ百科事典2000』イヤープック「環境問題：これからの科学者に求められるもの」1999年7月、「ロボット：真の意味での『新しい感性』にむけて」1999年10月、「原子力公害：『権力』そのものを具現するシステムがもつお粗末なほころび」2000年1月、「インターネットの虫」2000年4月
- 41) 「科学論を読む」『日経サイエンス』2000年
- 42) 「ジャック・ブーヴレス」『大航海』no.34、2000年
- 43) 「ヒトゲノム解読後に何が起こる？」(池田清彦氏との対談)『公研』2000年9月号
- 44) 「科学的事実の社会的構成という視点がつ射程」『社会思想史研究』no.24、2000
- 45) 「私の二〇〇〇年」『週刊読書人』第2367号、2000年12月22日
- 46) 「あしたを紡ぐ (2)：無限の生 迷い道」『日本経済新聞』2000年12月30日
- 47) 「進歩が変える人間観」『読売新聞』夕刊、2001年1月26日
- 48) 「シンポジウム：サイエンス・ウォーズから考える」(鼎談：金森修・佐倉統・茂木健一郎)『UP』340号、東京大学出版会、2001年
- 49) 「社会構想としてのゲノム学」『毎日新聞』2001年3月4日
- 50) 「The Tuskegee Study」『科学と社会』文部科学省科学研究費平成12年度研究成果報告書、2001年
- 51) 「文化系におけるインターネット利用」『タフネット』第9・10合併号、2001年4月1日
- 52) 「新任教官の紹介」[部内報]東京大学大学院教育学研究科・教育学部、31号、2001年
- 53) 「トライアングル 安全社会への道 ㊤」『読売新聞』夕刊、2001年4月4日
- 54) 「人文学への吊鐘」『大航海』no.38、2001
- 55) 「21世紀のための20世紀の文化遺産」『季刊iichiko』no.70、2001年
- 56) 「撤退的な傍観者として」『生物学史研究』no.67、2001年
- 57) 「科学と社会構想」『科学』vol.71, no.4-5、2001年
- 58) 「『科学の政治性』にとっての一級資料」富士川游主筆『人性』復刻版推薦文、不二出版、2001年
- 59) 「紙の時間、Eの時間」『本とコンピュータ』第2期、第1号、2001年
- 60) 「デカルト——未来の発見者たち第1回」『毎日新聞』夕刊、2001年9月10日
- 61) 「ヒューム——未来の発見者たち第2回」『毎日新聞』夕刊、2001年9月17日
- 62) 「鉄腕アトムの世紀、人間・社会 ㊦」『読売新聞』

- 夕刊、2001年9月20日
- 63) 「東大から何が見える 21世紀の展望：最終回 生命倫理」(新井賢一氏との対談)『東京大学新聞』第2145号、2001年9月25日
- 64) 「なぜ、今、感性哲学なのか？」(桑子敏雄、金森修、萩原なつ子、清水正之)『感性哲学』no.1、2001年
- 65) 「コント——未来の発見者たち第3回」『毎日新聞』夕刊、2001年10月1日
- 66) 「自著紹介『サイエンス・ウォーズ』」、『LISA』vol.8、no.10、2001年
- 67) 『角川世界史辞典』角川書店、2001年、項目：アラン、ヴェユ、カミュ、コクトー、サルトル、世紀末思想、ソシュール、デカダンス、フーコー、ベルクソン、ボーヴォアール、レヴィ=ストロース
- 68) 「フーリエ——未来の発見者たち第4回」『毎日新聞』夕刊、2001年10月22日
- 69) 「ニーチェ——未来の発見者たち第5回」『毎日新聞』夕刊、2001年10月29日
- 70) 「遺伝子組換えは、人類を衰亡させる？」(談話)『Free & Easy』vol.4、no.37、2001年
- 71) 「『文化の切れはし』と『自然』」(中村桂子さんとの対談)『季刊生命誌』vol.9、no.2、通巻31号、2001年
- 72) 「レオポルド——未来の発見者たち第6回」『毎日新聞』夕刊、2001年11月5日
- 73) 「科学論の現在：『サイエンス・ウォーズ』を経て」(鼎談：金森修、小松美彦、塚原東吾)『週刊読書人』第2411号、2001年11月9日
- 74) 「バシュラール——未来の発見者たち第7回」『毎日新聞』夕刊、2001年11月12日
- 75) 「ヨナス——未来の発見者たち第8回」『毎日新聞』夕刊、2001年11月19日
- 76) 「工学世界の機械狩り」『MeSci』vol.1、創刊号、日本科学未来館、2001年
- 77) 「科学論①メタ科学の腐葉土」『現代思想』vol.29、no.15、2001年
- 78) 「トフラー——未来の発見者たち第9回」『毎日新聞』夕刊、2001年11月26日
- 79) 「遺伝子をめぐる近未来Q&A」『まとりた』vol.12、2001年
- 80) 「私は『ロボットと科学』をこう考える」『高2講座encollege 小論文』2001年12月号
- 81) 「フーコー——未来の発見者たち第10回」『毎日新聞』夕刊、2001年12月3日
- 82) 「自然との調和求めて——パネル討論会：生命科学の世紀と生命観・価値・民主主義」(鼎談：梅原猛、中村桂子、金森修)『読売新聞』2001年12月6日
- 83) 「神学者による、技術推進派的な論理の構築」『生物学史研究』no.68、2001年
- 84) 「ヒトゲノム計画の社会的倫理的意味」(討論)渡邊悦生・中村和夫編『科学を学ぶ者の倫理』、成山堂書店、2001年
- 85) 「『場所』の変幻」『10+1』no.26、2002年
- 86) インタビュー「『高木仁三郎著作集』刊行によせて」『図書新聞』第2571号、2002年
- 87) 「『日本の博物図譜』展」『比較文学研究』no.79、2002年
- 88) 坂本百大監修『3日でわかる哲学』ダイヤモンド社、2002年、項目：「エコロジーの中の哲学」、「さまざまな形態をとるエコロジー思想」、「医療という名の女性への迫害」、「女性差別問題とエコロジーの接点」、「人間がクローンの人権を侵害する」、「遺伝子の解明によって人工的に生命が生まれるか?」、「生きている時だけでなく、死も共同体験」
- 89) 「生命倫理」(新井賢一氏との対談：134と同じ内容のもの)『東大は主張する』、東京大学新聞年鑑2001、2002年
- 90) 「東大教師が新入生にすすめる本」『UP』第354号、東京大学出版会、2002年、『東大教師が新入生にすすめる本』文春新書、2004年
- 91) 「『場所』のナラトロジー」『10+1』no.27、2002年
- 92) 談話：「生命とリスク——科学技術とリスク論」『談』no.67、2002年
- 93) 「ナレッジ・マネジメントと『一般人の科学理解(PUS)』」(S・フラーと共に)『臨床評価』vol.29、no.2-3、2002年
- 94) 「『風景画』としての都市」『10+1』no.28、2002年
- 95) 市野川容孝編『生命倫理とは何か』平凡社、2002年、項目：「人体実験」、「ヒトゲノム計画」
- 96) 「都会性の夢」『10+1』no.29、2002年
- 97) 「リスク論は社会のなかでどのように使われているのか」(討論：金森修、入来篤史、可知直毅、

- 鳥海光弘、和達三樹)『科学』vol.72、no.10、2002年
- 98) 「デジタル・デモクラシーについて」『FINE研究会報告書』no.9、2002年
- 99) “Ethics of Genetic Life Design” *Proceedings of IV Asian Conference of Bioethics*, 22-25 November 2002 in Seoul, Asian Bioethics Association et al. “Ethics of Genetic Life Design” Song Sang-yong, Koo Young-Mo, Darryl Macer eds., *Asian Bioethics in the 21st Century*, Eubios Ethics Institute 2003
- 100) 「摂食障害のスペクトル」『生物学史研究』no.70、2002年
- 101) 「工学的世界のなかの都市」『10+1』no.30、2003年
- 102) 「著者のこの視点——この人に聞く」(『負の生命論』をめぐって)『創価新報』2003年
- 103) 「私が大学時代に学んだこと」『進学情報ニュース』第34号、2003年
- 104) 「日本の博物図譜——19世紀から現代まで展」今橋映子編『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会、2003年
- 105) 「仮装の遺伝学」『環』vol.14、2003年夏号
- 106) 「人体実験と医療倫理」(小俣和一郎・田村修との鼎談)『東京保険医新聞』第1243号、2003年8月5・15日合併号
- 107) 「科学的医学の周縁に潜むものへの配意——摂食障害を事例として」『講演集』第13回、七川欽次・志水正敏監修、近畿リウマチ病研究会、2003年
- 108) 「生命にとって技術とは何か」(対談：金森修＋松原洋子)『現代思想』vol.31、no.13、2003年
- 109) 著書を語る『「ベルクソン 人は過去の奴隷なのだろうか」』『書標』2003年11月号
- 110) 「PVS患者の生と死」,「総合討論」『メディカルエシックス』29、第29回医学系大学倫理委員会連絡会議記録、ホテルグランドパレス、2003年7月開催、2003年12月刊
- 111) 「日本における生命倫理学の成立と展開」討論参加『生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の開発研究』科学研究費平成15年度研究成果報告書、2004年
- 112) 「待機の薔薇」最相葉月『青いバラ』新潮文庫、解説、2004年
- 113) 「ES細胞研究と人間の尊厳」『人間会議』、2004年夏号
- 114) 「生命倫理 科学の足かせか」『朝日新聞』2004年9月19日
- 115) 「萌えだし、つなぐ壘」『高橋禎彦——花のような』、FORUM ART SHOP 展覧会カタログ、2004年
- 116) 「科学は他人事か」『朝日新聞』2004年10月24日
- 117) 「研究室散歩：正解のない現代医療」『東京大学新聞』第2275号、2004年10月26日
- 118) “Beyond Therapy and Liberal New Eugenics” Darryl Macer ed., *Challenges for Bioethics from Asia*, Eubios Ethics Institute, 2004
- 119) 「治療を超えた医療は許されるか」『聖教新聞』第15012号、2004年11月18日
- 120) 「頑張れ、教養人」『朝日新聞』2004年12月5日
- 121) “Philosophico-cultural Attendance on Homo Geneticus” *Proceeding of the 5th East Asian STS Conference*, Hoam Faculty House, Seoul National University, 2004
- 122) 「ひとりぼっちのユートピア」『朝日新聞』2005年1月16日
- 123) 「この瞬間を歴史に刻む」『朝日新聞』2005年2月20日
- 124) 「科学哲学①PVS患者の生と死」、「科学哲学②クローン研究をめぐる諸問題」、「科学哲学③治療を超えて」『科学における社会リテラシー2』総合研究大学院大学、2005年
- 125) 「リベラル新優生学の設計的生命論」高等研報告書『臨床哲学の可能性』国際高等研究所、2005年
- 126) 「意味と価値を含めた科学研究を」『MOKU』2005年
- 127) 「仮想の遺伝学」小倉孝誠・宮下志朗編『ゾラの可能性』藤原書店、2005年
- 128) 「サイエンス・ウォーズ：現状からの総括」、「総合討論」『科学・社会・人間』no.93、2005年3号
- 129) 「基礎学力——科学論の立場から」、「質疑応答(1)」、「質疑応答(2)」『「基礎学力」の再検討』文部科学省21世紀COEプログラム、2005年
- 130) 「対談：いのち、ゾーエーとピオスの狭間で」(小泉義之との対談)『談』no.74、2005年
- 131) 「北京国際科学史学会に出席して」『湘南科学史懇話会通信』第13号、2005年

- 132) 「本は人生そのもの」『文藝春秋』特別版、11月臨時増刊号、2005年
- 133) 「脳科学の最前線で」(茂木健一郎との対談)『週刊読書人』第2613号、2005年11月18日
- 134) 「言葉が抱える〈地理学〉」『すばる』2005年12月号
- 135) 「思想 メタ・バイオエシックス合評会」『応用倫理学研究』第3号、応用倫理学研究会、2006年
- 136) 「〈世界不妊〉の詩想をめぐる断章」『生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の開発研究』、2006年
- 137) “Review of Shigehisa Kuriyama et al. *Kindai nihon noshintai kankaku*” *Historia Scientiarum*, vol.15, no.3, 2006
- 138) 「ビッグブラザーの、自由な末裔」『Web マガジン en』財団法人塩事業センター、2006年4月号
- 139) 「青春の一冊：『南回帰線』ヘンリー・ミラー」『東京大学新聞』2006年5月2日
- 140) 「アメリカ生命倫理学に対するメタ分析的、かつ歴史的な研究」『第29回日産学術研究助成』報告書、日産科学振興財団、2006年
- 141) 「『死への運動』の運動性の保護のために」『anjali』no.11、2006
- 142) 「命の裁量——“安楽死”事件を考える」(橋爪大三郎氏との対談)『公研』no.514、2006年
- 143) 「“エコロジーの文化政治学”から「平和」を紡ぐ」(綿貫礼子氏との対談)『季刊 軍縮地球市民』no.6、2006年
- 144) 「心にのこる一冊：バシュラール『科学的精神の形成』」『科学』vol.76、no.11、2006年
- 145) 「遺伝的デザインの文化的制御」山中浩司・額賀淑郎編『遺伝子研究と社会』昭和堂、2007年
- 146) 「産業社会とは異なる規範を示す空間に」『科学』vol.77、no.5、2007年
- 147) 「知識社会を支える基盤組織としての自覚を」『淡青評論』no.1359、東京大学広報委員会、2007年
- 148) 「本当の『公益』の在り処を探る」公開自主講座『宇井純を学ぶ』2007年、宇井紀子編『ある公害・環境学者の足取り』亜紀書房、2008年
- 149) 「mad engineer ?」日本ジュール・ヴェルヌ研究会『Courrier du Czar』no.5、2007年
- 150) 「蟬と人間」『鉄門だより』第639号、2007年
- 151) “Bios et Bioéthique”, “Rationalité Scientifique et Praxéologie Orientale”, “Science Wars” et ses Suites au Japon”, “Gouvernement Culturel de ‘Design’ Génétique” 『フランス科学文化論の歴史的展開及び現代的意義に関する思想史的・哲学的包括的研究』、2008年
- 152) 「思想の100年をたどる(4)」座談会：荻野美穂・金森修・杉田敦・吉見俊哉『思想』第1008号、2008年4号、2008年
- 153) 「ミシェル・セール 混合体の哲学」鷺田清一編『哲学の歴史』第12巻、中央公論社、2008年
- 154) 「近未来社会の中の理科教育」『『倫理的観点に立った日本の教育の問題点の解明及び求められる基本戦略の研究』について』財団法人二十一世紀文化学術財団、加藤研究会報告書、2008年
- 155) 「書物が私を作った」内山勝利他編『哲学の歴史』別巻、『哲学と哲学史』中央公論新社、2008年
- 156) 「記憶の反実在論」『Mobile Society Review』no.14、2008年
- 157) 「ピオスの生政治学的な射程」『立正大学人文科学研究年報』別冊第17号、2009年
- 158) 「思い出の中公新書」『中公新書の森』、中央公論新社、2009年
- 159) 「ベルクソンを通して、世界と繋がる」[会員の声] 日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第14号、2009年
- 160) 「編集後記」『医学哲学 医学倫理』日本医学哲学・倫理学会編、第27号、2009年
- 161) 「〈ヒステリーの失踪〉という謎」『フロイト全集』第6巻、岩波書店、月報12、2009年
- 162) 「日常世界と経験科学」『寺田寅彦全集』第3巻、岩波書店、月報3、2009年
- 163) 「〈座談会〉ベルクソンの過去から未来へ」金森修・合田正人・檜垣立哉『思想』第1028号、岩波書店、2009年12月号
- 164) 「死生学の可能性」、シンポジウム発表・討論『死生学の可能性』、東京大学大学院人文社会系研究科、グローバルCOEプログラム、シンポジウム報告集、2010年
- 165) 「心に残る藤原書店の本」『心に残る藤原書店の本』創業二〇周年記念アンケート、2010年
- 166) 「青春の一冊：安部公房『他人の顔』」『東京大学新聞』2010年4月27日
- 167) 「聴こえない声を聴く」『いのちの選択』、岩波ブックレット no.782、岩波書店、2010年
- 168) 「巻頭言：〈人為〉の人間学」『研究室紀要』第

- 36号、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室、2010年
- 169) 「病」天沢退二郎・金子務・鈴木貞美編『宮沢賢治イーハトヴ学事典』弘文堂、2010年
- 170) 「編集後記」『医学哲学 医学倫理』日本医学哲学・倫理学会編、第28号、2010年
- 171) 「〈シモンドン哲学〉への道案内」2010年秋季シンポジウム・イントロダクション、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第16号、2011年
- 172) 「著者に聞く：ゴーレムが「語る」人間」『東京大学新聞』第2536号、2011年1月1日
- 173) 「脳死・臓器移植行政反対のためのメッセージ」[やめて!! 家族同意だけの『脳死』臓器摘出!] 緊急市民集会用、メッセージ、大阪府商工会館7階第2講堂、講演者：冠木克彦・小松美彦他
- 174) 「カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』：〈公共性〉の創出と融解」『現代思想』七月臨時増刊号：震災以後を生きるための50冊、2011年
- 175) 「3.11後を考えるために：ホルクハイマー・アドルノ『啓蒙の弁証法』岩波文庫」『東京新聞』2011年6月19日
- 176) 「〈翳り〉の誘惑」『Topophilie 夢の空間』東京大学大学院総合文化研究科、田中純ゼミ、2011年
- 177) 「臓器移植法改正案に反対した科学哲学者、金森修さんの思い」田中紗織他編『哲楽』第三号、発行：田中紗織、2012年
- 178) 「カリキュラムの政治性の視点から」東京大学大学院教育学研究科・学校教育高度化センター『2011年度年報』、2012年
- 179) 「〈疎外〉としての心——吉本隆明追悼」『図書新聞』第3058号、2012年
- 180) 「科学見直し、文化の視点で」『日本経済新聞』2012年4月14日
- 181) 「ツアラトウストラ」東京大学出版会『UP』編集部編『東大教師が新入生にすすめる本』東京大学出版会、2012年
- 182) 「システムの信用失墜と機能不全」『環』vol.49、2012 Spring (特集：3.11と私)、藤原書店、2012年
- 183) 「ベルモント・レポート」、[薬害の定義と歴史] 盛永審一郎・松島哲久編『医学生のための生命倫理』丸善出版、2012年
- 184) 「iPSの“次の壁”」(米本昇平との対談)『公研』no.591、2012年11月号
- 185) 「異常/正常」、「科学知の社会学」、「バイオサイエンス/バイオテクノロジー」、「バシユラール」、「村上陽一郎」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012年
- 186) 「対談：〈人間の尊厳〉は悪魔の概念か」小松美彦との対談『週刊読書人』第2972号、2013年1月11日
- 187) 「〈人間圏〉の周辺で人間を考える」『聖教新聞』2013年3月12日
- 188) 「日本の科学思想史を俯瞰した先駆的作品」『場』Utpada、no.46、辻哲夫『日本の科学思想』刊行に寄せて、こぶし文庫、2013年
- 189) 上田恵介他編『行動生物学辞典』東京化学同人、2013年、項目「動物機械論」、「動物靈魂論」、「生氣論」
- 190) “Rapport sur la demande d’une habilitation a diriger des recherches concernant le dossier d’Arnaud François” Service des admissions et des études, Bureau des doctorants et HDR, École normale supérieure, le 5 décembre 2013
- 191) 「エピステモロジーの未来のために」『現代思想』vol.42-1、2014
- 192) “Commentary: Before the Dawn of Ethics in Synthetic Biology” Akira Akabayashi ed., *The Future of Bioethics*, Oxford University Press, 2014
- 193) 「高木仁三郎『市民の科学』解説」高木仁三郎『市民の科学』講談社学術文庫、2014年
- 194) 「鼎談：人文科学は減びるのか？」(島蘭進+小松美彦+金森修)『週刊読書人』第3031号、2014年3月14日
- 195) 「つまらない現実との穏やかな闘争」『ころ』vol.18、平凡社、2014年
- 196) 「桜井智恵子『現代日本の教育観』を問いなおす」コメント『現代と親鸞』第28号、親鸞弘教センター、2014年
- 197) 「私の思い出の一冊」『ころ』vol.19、平凡社、2014年
- 198) 「哲学はいかに生命を語ってきたか」『Kotoba』no.16、集英社、2014年夏号
- 199) 「発生学の考古学」『科学史研究』第53巻 no.270、2014年
- 200) 「今井康雄 教育におけるモノとメディア：質

- 疑応答』『研究室紀要』第40号(東京大学大学院教育学研究科・基礎教育学研究室)、2014年
- 1) 「科学批判学の未来」(近藤和敬との対談)『現代思想』vol.42、no.12、2014年
 - 201) 「科学と可能的・幻想的世界」『科学フォーラム』(東京理科大学) 2014年12月号
 - 202) 「三・一一後の日本と、人の命」『高校生と考える日本の問題点』桐光学園大学訪問授業、左右社、2015年
 - 203) 「原爆が変えた世界、そして今」(緑慎也との対談)『週刊読書人』第3091号、2015年5月29日
 - 204) 「科学の危機からの目覚め」『聖教新聞』2015年6月18日
 - 205) 「文明史の転換と科学批判」『情況』第四期、2015年-2016年12月・1月新年合併号、2015年
 - 206) 「酒席の議論」『日本経済新聞』朝刊、2016年4月2日
 - 207) 「動物哲学から動物の哲学へ——動物靈魂の周辺」『談』第106号、公益財団法人たばこ総合研究センター、2016年6月

学会発表・講演

- 1) 「エレヌ・メッツジェの評価を巡って」化学史学会春の学校、東京大学、1990年3月
- 2) 「F・ダゴニエ哲学の概要」化学史学会春の学校、東京大学先端科学技術研究センター、1992年3月21日
- 3) 「カンギレムにおける生命と機械」フランス哲学会シンポジウム、東京日仏会館、1992年4月6日
- 4) 「初期コントにおける生命論」日本科学史学会、東海大学、1993年5月30日
- 5) 「フランスにおけるネオラマルキズムの一挿話——記憶説を中心に」生物学史学会夏の学校、1993年8月21日
- 6) “De la critique culturelle d’Asajiro Oka” 日仏会館、1994年2月10日
- 7) 「アナロジー論争」筑波大学理論文学会、1994年3月24日
- 8) 「刺激感受性の概念史素描」日本科学史学会、立命館大学、1994年5月29日
- 9) 「フーコーの真理論」第五回科学技術社会論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、1994年9月24日

- 10) “Sur Ninomiya Sontoku” Journée des Études Japonaises, Maison Franco-Japonaise, 1995年2月25日
- 11) 「科学と政治の関係を巡って」第七回科学技術社会論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、1995年3月21日
- 12) 「ブルーノ・ラトウール論」第十回科学技術社会論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、1995年12月9日
- 13) 「場と文化技術」文化科学高等研究院・ホロニック技術研究会、有楽町朝日スクエア、1996年1月25日
- 14) “État du Paysan a la Société Féodale du Japon: Le Cas Sontoku Ninomiya” シンポジウム「一八世紀・一九世紀日本における知の秩序」フランス共和国リヨンアジア東洋研究所、1996年3月15日
- 15) 「技術の哲学」第11回科学技術社会論研究会、東大先端科学技術研究センター、1996年3月23日
- 16) 「場所概念を巡って」金沢工業技術大学、場所ラボラトリー、1996年7月2日
- 17) 「場所としての心」帯広環境ラボラトリー、1996年9月20日
- 18) 「橋田邦彦論」科学・技術と社会の会、NTTデータ通信システム科学研究所、1996年12月9日
- 19) “Mind as Place” 場所とシントピー国際会議、ドイツワイマール、1997年9月29日
- 20) 「社会的認識論の真理観と知識観」日本科学哲学会、千葉大学、1997年11月16日
- 21) 「ジョフロワ・サン＝ティレル論」ICU科学史の学校、1997年12月12日
- 22) “Réception de Gaston Bachelard au Japon” ブルゴーニュ大学ガストン・バシュラールセンター、1998年3月12日
- 23) “On Social Épistémology” STS国際会議、京阪奈プラザ、1998年3月21日
- 24) 「社会的認識論と好奇心を巡って」国際日本文化研究センター、1998年3月28日
- 25) 「場所概念を巡って」ワークショップ『生物の内と外』、葉山湘南国際村センター、1998年4月1日
- 26) 「ジョフロワ・サン＝ティレル論」日本科学史学会、愛知大学、1998年5月31日
- 27) 「加藤弘之の晩年の思想」Melyst研究会、目黒久米美術館、1998年6月23日

- 28) 「技術哲学を巡って」科学技術論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、1998年6月27日
- 29) 「サイエンス・ウォーズを巡って」STS夏の学校、東海大学山中湖セミナーハウス、1998年7月19日
- 30) 「医療の哲学に向けて」日本科学哲学学会、鹿児島大学、1998年11月21日
- 31) 「環境の文化政治学に向けて」国際高等研究所、1999年1月24日
- 32) 「サイエンス・ウォーズを巡って」シンポジウム『科学を考える』、名古屋大学、1999年1月30日
- 33) 「環境の政治学」東京工業大学、火ゼミ、1999年2月23日
- 34) 「環境の政治学」科学技術社会論研究会、1999年3月29日
- 35) “Shinpei Goto, Bio-pouvoir et Ingénierie Sociale” シンポジウム『フーコーと医学』、カンIMEC、1999年4月17日
- 36) 「サイエンス・ウォーズを巡って」日本科学史学会、拓殖大学、1999年5月23日
- 37) 「科学的とは何か」科学基礎論学会、大阪大学、1999年5月30日
- 38) 「サイエンス・ウォーズを巡って」総合研究院大学院大学、1999年7月10日
- 39) 「ラディカル環境アクティビズムの一断片」STS夏の学校、関西地区大学セミナーハウス、1999年7月25日
- 40) 「科学的事実の社会的構成という視点をもつ射程について」シンポジウム『思想のメディア』、社会思想史学会、愛知大学、1999年10月11日
- 41) 「技術衝迫の行方、自律性の射程」シンポジウム『複雑系：理論と新技術』、早稲田大学、2000年5月1日
- 42) 「サイエンス・ウォーズを巡って」科学史学校、東京上野科学博物館、2000年7月22日
- 43) 「サイエンス・ウォーズ」(東京大学出版会)刊行記念、金森修+佐倉統+茂木健一郎パネルトーク(仮題)『サイエンス・ウォーズ』とは/から、青山ブックセンター本店、カルチャーサロン青山、2000年8月28日
- 44) 『サイエンス・ウォーズ』合評会、東京大学先端科学技術研究センター、2000年9月11日
- 45) “An analysis of SMON case” 「遺伝子強化の論理と倫理」(Logic and Ethics of Gene Enhancement) 4S/EASST国際会議、ウィーン大学、2000年9月27日~30日
- 46) 「ヒトゲノム計画の社会的倫理的意味」ならびに「討論」『科学を学ぶ者の倫理観』、東京水産大学、2000年11月6日
- 47) “Risques et Malaises” デュジョン国際シンポジウム『気候のリスクと千年期の強迫観念』ブルゴーニュ大学気候研究センター、2000年11月16日~18日
- 48) “Jinzaburo Takagi, The Third Pole of Environmental Think Tank” 『第二回東アジアSTS会議』韓国ソウル、延世大学、2001年5月11日
- 49) 「タスキーギ研究の背景」日本科学史学会、早稲田大学、2001年5月26日
- 50) “Discourse on Life Designing and its Ontological Signification” メキシコシティ、科学史国際学会、2001年7月8日~7月14日
- 51) 『遺伝子改造社会 あなたはどうする』合評会、国際高等研究所、2001年8月4日
- 52) 「リスク論を考える」『グローバルスピ研究奨励金成果発表会』、新宿カタログハウス、2001年9月1日
- 53) 「場所の心」『第3回感性工学学会』、中央大学理学部、2001年9月13日
- 54) 「遺伝子改造社会の論理と倫理」『EMCA2001年度研究会』、筑波大学学校教育部、2001年9月29日
- 55) 「バイオレジオナリズムを巡って」都市・地方研究会、明治大学、2001年10月10日
- 56) 「科学論からみたタスキーギ研究の背景」『医療・技術・社会研究会』、上智大学、2001年10月20日
- 57) 「リスク論を考える」提題・司会、日本科学哲学学会、専修大学、2001年11月17日
- 58) パネル討論会「生命科学の世紀と生命観・価値・民主主義」(梅原猛・中村桂子・金森修+米本昌平)三菱化学生命科学研究所、創立30周年記念シンポジウム『21世紀の生命科学を創る』大手町経団連会館、2001年11月22日
- 59) 「遺伝子が語りかける21世紀の日常生活世界」EHW研究会、日立製作所、2001年12月20日
- 60) 「21世紀の生老病死：遺伝子改造社会の文化」横浜市立大学、よこはまアーバンカレッジ、2002年2月2日
- 61) 「技術哲学の基底性について」Fine Chiba

- Forum, 千葉大学、2002年2月8日
- 62) 「場所について」東京大学比較文学比較文化研究会、八王子大学セミナーハウス、2002年3月18日
- 63) 「ヒト遺伝学の新優生学的な展開の意味と射程」科学技術社会論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、2002年3月20日
- 64) 「場所としての心」感性工学会哲学部会研究会、岩出山地域福祉センター、2002年3月30日
- 65) 「科学的医療観の一元化への留保」FDRUGシンポジウム2002『医療における一般人の科学理解』、リクルートGINZA7、2002年5月25日
- 66) 「設計的な生命観の射程」信濃水崎夏期大学講座、長野県大町市木崎湖畔、2002年8月5日
- 67) 「摂食障害のカルチュラル・スタディーズ：ポルドを巡って」生物学史夏の学校、国民年金宿舍おくたま路、2002年8月30日
- 68) 「医学における科学性の定位——摂食障害を事例として」近畿リウマチ病研究会、都ホテル大阪、2002年8月31日
- 69) 「人体実験論の一具体例に関する考察」科学技術社会論学会、東京大学、2002年11月16日
- 70) 「ジャーナリズム的スタンスの内在化について」科学技術社会論学会、東京大学、2002年11月17日
- 71) “Science Wars and Japanese Postmodernism” the 72th Colloquium, the History and Philosophy of Science, Seoul National University, 20 November 2002
- 72) “Ethics of Genetic Life Design” IVth Asian Conference of Bioethics, Seoul National University, 24 November, 2002
- 73) 「タスキージ研究の科学と文化」科学技術社会論研究会、東京大学先端科学技術研究センター、2002年12月7日
- 74) “Comment on Public Lecture of Professor Barbara Koenig” Cornell/Sophia Universities Joint Workshop: Empirical Bioethics in Cultural Contexts, 上智大学、2003年1月30日
- 75) 「PVSと生命倫理」第30回日本集中治療医学会、ロイトン札幌・北海道厚生年金会館、2003年2月5日
- 76) 「遺伝的生命設計の哲学」第10回応用解析研究会、箱根パークス吉野、2003年3月4日
- 77) 「私が大学時代に学んだこと」東京大学教養学部進学情報センターシンポジウム、2003年4月25日
- 78) 「健康の科学をめぐる知」共同主催、レスポナント、科学技術社会論研究会ワークショップ、東京大学先端科学技術研究センター、2003年6月21日
- 79) 「PVS患者の生と死に関わる倫理的考察」第29回医学系大学倫理委員会連絡会議シンポジウム、ホテルグランドパレス、2003年7月5日
- 80) 「遺伝子改造論の射程」生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の開発研究、第1回研究会、北沢タウンホール、2003年9月20日
- 81) “Topography of eating disorders” East Asian STS Conference, Institute of History and Philology, Academia Sinica, Nankang, Taipei, Taiwan, 5 October 2003
- 82) 「摂食障害論」身体医文化論研究会、慶應義塾大学、2003年10月22日
- 83) 「明治期における進化論受容の一形態」学習院大学、2003年11月29日
- 84) 「自然主義と反自然主義について」(戸田山和久氏との対談) 池袋ジュンク堂、2003年12月1日
- 85) “Portrait and Shadow of Liberal New Eugenics” 国際シンポジウム『先端医療技術における政策形成』、大阪大学文学部、2003年12月13日
- 86) 「遺伝的公共性の哲学」第51回公共哲学京都フォーラム、リーガロイヤルホテル京都、2003年12月21日
- 87) “Beyond Therapy and Liberal New Eugenics” Fifth Asian Bioethics Conference, Eubios Ethics Institute, University of Tsukuba, 2004年2月14日
- 88) 「遺伝子改造論の射程」21世紀における生存科学としてバイオエシックスの構築研究会、銀座、生存科学研究所、2004年2月27日
- 89) 「場所の心」玉川大学脳科学研究施設「生命観」部門第15回研究会、箱根湯本ホテルおかだ、2004年3月7日
- 90) 「PVS患者の処遇問題」『科学文明において平等と公正を実現する社会システムについての研究』第5回研究会、東京工業大学、2004年4月5日
- 91) 「摂食障害の文化論」日仏会館2004年度日仏文化講座、日仏会館、2004年6月18日
- 92) 「精神薬理の現代的展開と倫理問題についての

- 一考察」第50回くすり勉強会、2004年10月16日
- 93) 「或る医学的一元論の極北」第23回日本医学哲学・倫理学会、昭和大学、2004年10月23日
- 94) “Cultural governance of Homo Geneticus” 第23回エコエティカ国際シンポジウム、京都パークホテル、2004年11月8日
- 95) 「生命倫理成立初期における神学者の役割についての素描」第3回科学技術社会論学会年次研究大会、金沢工業大学、2004年11月13日
- 96) 「遺伝子改造論の行方」日本生命倫理学会、第16回年次大会、鳥取環境大学、2004年11月27日
- 97) 「ゾラの遺伝学」科学技術社会論研究会ワークショップ、東京大学先端科学技術研究センター、2004年12月4日
- 98) “Philosophico-cultural governance of Homo Geneticus” The 5th East Asian STS Conference, December 8-11, Seoul National University, Seoul
- 99) 「サイエンス・ウォーズ、その後」日本物理学会、東京理科大学、2005年3月25日
- 100) 「学力論——科学論の立場から」東京大学教育学部COE研究会、東京大学、2005年5月11日
- 101) 「生命観の探求 ワークショップⅠ」総合研究大学院大学、八重洲ホール、2005年7月11日
- 102) 「サイエンス・ウォーズ：現状での総括」北京大学、2005年7月21日
- 103) 「橋田邦彦論」北京大学、2005年7月22日
- 104) “Cultural Governance of Genetic Design” 第22回国際科学史大会、北京、2005年7月25日
- 105) 「遺伝子改造の哲学」哲学若手研究会フォーラム、八王子大学セミナーハウス、2005年7月30日
- 106) 「遺伝子改造の哲学をめぐって」19-20世紀医学思想史研究部会、東洋大学、2005年8月3日
- 107) 「遺伝子設計と教育思想」教育思想史学会、日本大学文理学部、2005年9月18日
- 108) 「プロメテウスの束縛」聖心女子大学キリスト教文化研究所、2005年10月20日
- 109) 「遺伝子改造論をめぐって」東京都立高等学校公民科『倫理・現代社会』研究会、東京都立文京高校、2005年11月11日
- 110) 「科学論者と科学者の対話——歴史としての『サイエンス・ウォーズ』の教訓から」司会・コメント、科学技術社会論学会、名古屋大学、2005年11月13日
- 111) 「生命と設計」日本科学哲学会、東京大学教養学部、2005年12月4日
- 112) 「アメリカの死・臨死に関する考え方の歴史的変遷について」持続可能社会へ向けた日本の科学技術の転換の社会史的研究、福岡ワークショップ、2005年12月18日
- 113) 「理科教育と知識社会」広島大学高等教育研究開発センター、2006年2月23日
- 114) 「フランスの医学哲学——ミルコ・グルメクを中心に」日仏哲学会、同志社大学、2006年3月25日
- 115) “Fundamentality of enhancement-seeking desire for Bios”, *The 8th World Congress of Bioethics*, Beijing, 北京国際会議中心、2006年8月8日
- 116) 「自然主義と文化」京都文化会議2006、第三回ワークショップ、京都大学三才学林、2006年10月8日
- 117) 「ビオスの装甲的生命観」総合研究大学院大学ワークショップ、京都ばるるプラザ、2006年10月23日
- 118) 「キャラハンの生命倫理」日本生命倫理学会第18回年次大会、岡山大学、2006年11月11日
- 119) 「ビオスの本源的装甲」日本生命倫理学会第18回年次大会、岡山大学、2006年11月12日
- 120) “Bios et Bioéthique” *Institut d’Histoire et de Philosophie des Sciences et des Techniques*, パリ、2006年11月24日
- 121) “Rationalité scientifique et praxéologie orientale”, “La ‘Science wars’ et ses suites au Japon”, “Gouvernement culturel du ‘design’ génétique”, *Centre Alexandre Koyré*, パリ、2006年11月27日
- 122) 「自然主義と文化による設計」『イノチのゆらぎとゆらめき』シンポジウム：「未来を拓く人文・社会科学」(独立行政法人 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業)、サンケイプラザ ホール、2007年3月9日
- 123) “Évolution Créatrice et Métaphysique de la vie” Ateliers euro-japonais sur «L’évolution créatrice» de Bergson, Université de Toulouse II Le Mirail. Maison de la Recherche. Salle des Actes, トゥールーズ、2007年4月19日
- 124) 「『創造的進化』と生命の形而上学」『名古屋哲

- 学研究会』、名古屋市立大学、2007年5月12日
- 125) “Fixation de l’instantané et de la forme” ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム『生の哲学の今』法政大学、2007年10月17日講演、法政大学、2007年10月17日、京都大学10月20日、司会
- 126) 「身体哲学と倫理」サイエンスアゴラ2007『サイボーグに未来はあるか?』、東京国際交流館メディアホール、2007年11月25日
- 127) 「エンハンスメントの哲学」国際公開シンポジウム『人間改造のエシックス プレインマシンインターフェースの未来』、京都大学、2008年1月14日
- 128) 「虚構の『近代』」：ブリュノ・ラトゥールとの対談、エスパス・イマージュ、日仏会館、2008年6月13日
- 129) 「三木の自然学と自然哲学」『第17回三木成夫記念シンポジウム：発生と進化』、順天堂大学、2008年7月23日
- 130) 「下村寅太郎の機械観」Être vers la vie, Colloque Euro-japonais, Cerisy-la-Salle, 2008年8月23日～30日
- 131) “Autour de la question de Bios et de Zoé” Autour du corps humain, Bioethique comparée France - Japon, Centre Georges Canguilhem, 2008年9月4日～5日
- 132) 「死の扉と、生の出口」シンポジウム『死生学の可能性』、東京大学文学部、2009年6月14日
- 133) 「生権力と死の思想」、『安楽死の思想史』『学術俯瞰講義』、2009年6月29日、7月6日、東京大学教養学部
- 134) 「病と死の傍らの賢治」日台国際研究会議『東アジアの死生学へ』、2009年10月30日、台湾国立政治大学
- 135) 「伝染病対策と、その文化」『吉岡やよいさん追悼シンポジウム』、東京大学、駒場ファカルティ・ハウス、2009年12月19日
- 136) 「死の臨在、死の消失点」朝日カルチャーセンター、2010年4月24日
- 137) 「あなたは臓器を提供しますか?——臓器移植の是非を問う」まちだ市民大学HATS、人間科学講座、2010年5月31日
- 138) 「〈いのち〉のありか」ノートルダム清心女子大学、国際教育フォーラム講演、2010年7月24日
- 139) 「芸術的創造と反自然主義」東京芸術大学大学院美術研究科、特別講演、2010年11月29日
- 140) 「巫人ゴーレム」シンポジウム『ゴーレムの表象——ユダヤの人造人間と現代』、基調報告、日本女子大学目白キャンパス、2011年2月19日
- 141) 「臨死の人間学的構造の根源性について」第16回日本緩和医療学会学術大会シンポジウム『緩和ケアにおけるEBMの意義と限界——総合的人間学としての緩和医療学へ』、ホテル・ロイトン札幌、2011年7月29日
- 142) 「合評会 VOL 05エピステモロジー：知の未来のために」大阪大学人間科学研究科、2011年8月26日
- 143) “After the Catastrophe — Rethinking the Possibility of Breaking with Nuclear Power” 『HiPeC 国際平和構築会議 2011』、広島国際会議場、2011年9月18日
- 144) 「専門知と教養知の境域」第22回教育思想史学会、東京大学本郷キャンパス、2012年10月14日
- 145) 「誰のための生命倫理なのか」『日本蘇生学会』第31回、講演、ピアザ淡海、2012年11月23日
- 146) 「原発事故と科学思想史」第61回湘南科学史懇話会、藤沢市労働会館、2013年1月19日
- 147) 「認識論とその外部——汚染と交歓」日本哲学会、第72回大会、シンポジウム「知識・価値・社会——認識論を問い直す」での発表、お茶の水女子大学、2013年5月11日
- 148) 「〈衰退する社会〉の中の社会倫理」東京大学公開講座『変わる／変える 20年後の世界：20年後の超高齢社会』、東京大学、2013年9月29日
- 149) 「〈反自然性〉の定位としての尊厳」シンポジウム『いまの時代、尊厳を問い直す』日本生命倫理学会、第25回年次大会、東京大学、2013年12月1日
- 150) 「一九世紀ヨーロッパにおける人工世界の表象——シャルル・バルバラの『ウィティントン少佐』を中心に」『科学の知と文学・芸術の想像力——ドイツ語圏世紀転換期の文化についての総合的研究』主催、東京大学教養学部、2014年3月17日
- 151) 「死と臨死を巡るアメリカ生命倫理学の歴史」第61回『日本麻酔科学会』招待講演、パシフィコ横浜、2014年5月16日
- 152) “The biopolitics of contemporary Japanese society” 国際シンポジウム『受容と抵抗——西洋

科学の生命観と日本』、法政大学ボアソナード・タワー、2014年6月12日

- 153) “Implications of the 3.11 nuclear power plant disaster” Workshop on “The neuro-turn and us: the history of science and medicine in the age of biomedicine”, 東京大学、2014年6月22日
- 154) 「〈遠隔的知識〉としての死」第15回臨床哲学シンポジウム『生きられる死』、東京大学、2015年12月13日

書評

- 1) 「隠喩『海』の系統発生」『季刊書評』夏季号、no.5、1981年
- 2) F・ダゴニエ『エティエンヌ・ジュール・マレー論』『比較文学研究』第54号、1988年
- 3) バシュラール『火の詩学』『信濃毎日新聞』、1990年11月18日
- 4) P・ロッシ『哲学者と機械』『化学史研究』vol 18、no.2 (通巻no.55)、1991年
- 5) ジェイムズ・バーナウアー『逃走の力』『情況』1994年7月号
- 6) 西川富雄監修『シェリング読本』『図書新聞』第2226号、1994年12月17日
- 7) J・バルトルシャイティス『鏡』、書評：E・カッシーラー『シンボルとスキエンティア』『化学史研究』第23巻第1号 (通巻第74号)、1996年
- 8) 「専門知に臨在する豊饒な周縁」『図書新聞』第2300号、1996年7月6日 * J・ロビンソン=ヴァレリー編『科学者たちのポール・ヴァレリー』の書評
- 9) 「周囲に浸潤する死を注視して」『図書新聞』第2304号、1996年8月3日 * 小松美彦『死は共鳴する』の書評
- 10) 「形態転写能としての知性のために」『図書新聞』第2320号、1996年11月30日 * F・ダゴニエ『イメージの哲学』の書評
- 11) 「〈隔絶した認識主体〉の止揚に向けて」『図書新聞』第2322号、1996年12月14日 * 森際康友編『知識という環境』の書評
- 12) 「専門知のスポークスマンから離れて」『図書新聞』第2326号、1997年1月18日
- 13) 「日本の科学論の再来？」『図書新聞』第2330号、

1997年2月15日

- 14) 「躍動する生が住み着く概念」『図書新聞』第2333号、1997年3月8日
- 15) 「曲折する境界たち」『図書新聞』第2336号、1997年4月5日
- 16) 「〈科学〉としての自己理解の吟味」『週刊読書人』第2180号、1997年4月11日 * J・ブーヴレス『ウィトゲンシュタインからフロイトへ』の書評
- 17) 「表象と〈事実〉との綴れ織」『図書新聞』第2340号、1997年5月3日
- 18) 「金科玉条としての功利主義」『図書新聞』第2342号、1997年5月24日
- 19) 「癌細胞としての概念」『図書新聞』第2347号、1997年6月28日
- 20) 「1997年上半期の収穫から」『週刊読書人』第2195号、1997年7月25日
- 21) 「技術的制作過程のモデル化」『図書新聞』第2351号、1997年7月26日
- 22) 「科学と反科学をめぐる戦争状態」『図書新聞』第2355号、1997年8月30日
- 23) 「脳科学と日常生活とのリンクの難しさ」『図書新聞』第2359号、1997年9月27日
- 24) 「人工と自然の永遠の闘争」『図書新聞』第2363号、1997年10月25日
- 25) 「知識生産のモード論に向けて」『図書新聞』第2367号、1997年11月22日
- 26) 「現代の自然哲学の概念的見取り図を与える」『週刊読書人』第2220号、1998年1月30日 * 伊藤邦武編『コスモロジーの闘争』の書評
- 27) 「地質学から見た科学史と科学哲学」『図書新聞』第2380号、1998年3月7日
- 28) 「環境と交歓する哲学」『図書新聞』第2389号、1998年5月9日 * 桑子敏雄『空間と身体』の書評
- 29) 「1998年上半期の収穫から」『週刊読書人』第2245号、1998年7月24日
- 30) 「覇気に満ちた理論的野心」『週刊読書人』第2249号、1998年8月28日 * 松本三和夫『科学技術社会学の理論』の書評
- 31) 「安全は権利か」『週刊読書人』第2275号、1999年3月5日 * 村上陽一郎『安全学』の書評
- 32) 「権威に追従する周縁性？」『週刊読書人』第2282号、1999年4月23日 * M・バー編『男たちの知らない女』の書評
- 33) 「技術にとって自然と人間とは何か」『図書新聞』

- 第2438号、1999年5月22日*長崎浩『技術は地球を救えるか』の書評
- 34) 「社会統制と偶然の狭間で」『週刊読書人』第2294号、1999年7月23日* I・ハッキング『偶然を飼いならず』の書評
- 35) 「99年上半期読書アンケート」『図書新聞』第2448号、1999年7月31日
- 36) ブルーノ・ラトゥール『科学が作られているとき』『科学哲学』vol.32、no.2、1999年
- 37) 「環境保護運動を減殺させる大企業の多様な戦略を開陳」『図書新聞』第2463号、1999年11月27日* S・ピーダー『グローバルスピンの書評
- 38) ブルーノ・ラトゥール『科学が作られているとき』『科学史研究』vol.38、no.212、1999年
- 39) 「99年下半期読書アンケート」『図書新聞』第2467号、1999年12月25日
- 40) 「現代科学論への格好の誘い」『週刊読書人』第2336号、2000年5月19日* S・フラー『科学が問われている』の書評
- 41) 「『技術の哲学』の成熟に向けて」『図書新聞』第2490号、2000年6月17日* L・ウィナー『鯨と原子炉』の書評
- 42) 「2000年上半期の収穫から」『週刊読書人』第2346号、2000年7月28日
- 43) 「2000年上半期の収穫から」『図書新聞』第2496号、2000年8月5日
- 44) 「フェミニズム科学論の成果」『週刊読書人』第2354号、2000年9月22日* D・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ』の書評
- 45) 「一つの願いの顕わな表出」『週刊読書人』第2366号、2000年12月15日* 高木仁三郎『鳥たちの舞うとき』の書評
- 46) 「2000年下半期の収穫から」『図書新聞』第2515号、2000年12月23日
- 47) ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ』『科学史研究』第39巻、no.216、2000年
- 48) 「2000年読書アンケート」『みすず』478号、2001年1月15日
- 49) ロイス・ウィンガーソン『ゲノムの波紋』『読売新聞』2001年1月21日
- 50) スティーブ・ハイムズ『サイバネティクス学者たち』『読売新聞』2001年1月28日
- 51) アラン・リピエッツ『政治的エコロジーとは何か』『読売新聞』2001年2月11日
- 52) 南木佳士『海へ』『読売新聞』2001年3月4日
- 53) 佐江衆一『自鳴琴からくり人形』『読売新聞』2001年3月11日
- 54) 向井承子『脳死移植はどこへ行く?』『読売新聞』2001年3月25日
- 55) 中沢新一『フィロソフィア・ヤポニカ』『読売新聞』2001年4月1日
- 56) グレゴリー・ベンス『医療倫理』『読売新聞』2001年4月8日
- 57) カール・サフィナ『海の歌 人と魚の物語』『読売新聞』2001年4月29日
- 58) 「構築主義の成熟のために」『週刊読書人』第2385号、2001年5月4日* 上野千鶴子編『構築主義とは何か』の書評
- 59) ロジャー・シャタック『禁断の知識』『読売新聞』2001年5月13日
- 60) 村瀬学『哲学の木』『読売新聞』2001年5月20日
- 61) 桑子敏雄『感性の哲学』『読売新聞』2001年5月27日
- 62) 荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会』『読売新聞』2001年6月3日
- 63) 最相葉月『青いバラ』『読売新聞』2001年6月10日
- 64) レイ・カーツワイル『スピリチュアル・マシーン』『読売新聞』2001年6月24日
- 65) ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ』『読売新聞』2001年7月22日
- 66) 「2001年上半期の収穫から」『週刊読書人』第2397号、2001年7月27日
- 67) ジョナサン・ビーチャー『シャルル・フォーリエ伝』『読売新聞』2001年7月29日
- 68) 「2001年上半期読書アンケート」『図書新聞』第2544号、2001年8月4日
- 69) 近藤誠・日垣隆他『死の準備』『読売新聞』2001年8月5日
- 70) 「規制の欠陥を指摘する」『週刊読書人』第2399号、2001年8月10日* 粥川準二『人体バイオテクノロジー』の書評
- 71) ドミニック・オフレ『評伝アレクサンドル・コジェーヴ』『読売新聞』2001年8月19日
- 72) 西村肇、岡本達明『水俣病の科学』『読売新聞』2001年9月2日
- 73) エリック・シュローサー『ファストフードが世界を食いつくす』『読売新聞』2001年9月23日

- 74) 最相葉月『青いバラ』『感性哲学』no.1、2001年
- 75) マーガレット・アトウッド『寝盗る女』『読売新聞』2001年9月30日
- 76) 青山潤三『世界遺産の森 屋久島』『読売新聞』2001年10月7日
- 77) 村上龍『最後の家族』『読売新聞』2001年10月14日
- 78) 「総覧的な評価を提示」『週刊読書人』第2408号、2001年10月19日 * ポパー哲学研究会編『批判的合理主義』第1巻の書評
- 79) ディヴィッド・クーパー、ロバート・ランザ『異種移植とはなにか』『読売新聞』2001年10月28日
- 80) シェルドン・クリムスキー『ホルモン・カオス』『読売新聞』2001年11月4日
- 81) ヘンリー・ペトロスキー『橋はなぜ落ちたのか』『読売新聞』2001年11月11日
- 82) 御興久美子他『人クローン技術は許されるか』『読売新聞』2001年11月18日
- 83) 平澤正夫『超薬アスピリン』『読売新聞』2001年11月25日
- 84) デボラ・ブラム『なぜサルを殺すのか』『読売新聞』2001年12月16日
- 85) 「2001年下半年読書アンケート」『図書新聞』第2563号、2001年12月22日
- 86) 「2001年私のベスト3」『読売新聞』2001年12月23日
- 87) ジョナサン・ビーチャー『シャルル・フーリエ伝』、『科学史研究』vol.40、no.220、2001年
- 88) ユーリー・ストヤノフ『ヨーロッパ異端の源流』『読売新聞』2002年1月13日
- 89) 「2001年読書アンケート」『みすず』第490号、2002年
- 90) 森岡正博『生命学に何ができるか』『読売新聞』2002年1月20日
- 91) 「労働過程論の民族誌的記載」『週刊読書人』第2421号、2002年1月25日 * 福島真人『暗黙知の解剖』の書評
- 92) 安保徹『医療が病いをつくる』『読売新聞』2002年2月17日
- 93) 植村恒一郎『時間の本性』『読売新聞』2002年2月24日
- 94) ロンダ・シービング『ジェンダーは科学を変える!?』『読売新聞』2002年3月3日
- 95) 森部一編『文化人類学を再考する』『読売新聞』2002年3月10日
- 96) ロジャー・ゴスデン『デザイナー・ベビー』『読売新聞』2002年3月17日
- 97) グレアム・スウィフト『ウォーターランド』『読売新聞』2002年3月31日
- 98) 橋本毅彦『〈標準〉の哲学』『読売新聞』2002年4月14日
- 99) 江原由美子『自己決定権とジェンダー』『読売新聞』2002年5月5日
- 100) L・ジーブ、K・バイエルツ、M・クヴァンテ『ドイツ応用倫理学の現在』『読売新聞』2002年5月12日
- 101) 山口節郎『現代社会のゆらぎとリスク』『読売新聞』2002年5月26日
- 102) ペリー・アンダーソン『ポストモダニズムの起源』『読売新聞』2002年6月9日
- 103) 和田敦彦『メディアの中の読者』『読売新聞』2002年6月30日
- 104) ボリア・サックス『ナチスと動物』『読売新聞』2002年7月14日
- 105) 松本哉『寺田寅彦は忘れた頃にやってくる』『読売新聞』2002年7月21日
- 106) 「2002年上半年期の収穫から」『週刊読書人』第2447号、2002年7月26日
- 107) ミゲル・デリーベス『異端者』『読売新聞』2002年7月28日
- 108) 「予防原則 vs 科学的整合性：薬師院仁志『地球温暖化論への挑戦』[i feel]、no.21、2002年 * 薬師院仁志『地球温暖化論への挑戦』の書評
- 109) 「2002年上半年期の収穫から」『図書新聞』第2592号、2002年8月3日
- 110) マクシム・シュワルツ『なぜ牛は狂ったのか』『読売新聞』2002年8月4日
- 111) トム・カークウッド『生命の持ち時間は決まっているのか』『読売新聞』2002年8月11日
- 112) 大橋健二『反近代の精神 熊沢蕃山』『読売新聞』2002年9月1日
- 113) リチャード・ローティ『リベラル・ユートピアという希望』『読売新聞』2002年9月15日
- 114) 「痛ましい事実の数々が」『週刊読書人』第2454号、2002年9月20日 * 小俣和一郎『ドイツ精神病理学の戦後史』、『近代精神医学の成立』の書評
- 115) 村上義雄『人間 久野収』『読売新聞』2002年10月6日

- 116) R・E・タンジ、A・B・パーソン『痴呆の謎を解く』『読売新聞』2002年10月20日
- 117) 二宮陸雄『インスリン物語』『読売新聞』2002年10月27日
- 118) 『『海賊』としてのバイオ技術? : バングナ・シバ『バイオパイラシー』』『i feel』、no.22、2002年
- 119) 林真理『操作される生命』『読売新聞』2002年11月10日
- 120) 小川隆夫『マイルス・デイヴィスの真実』『読売新聞』2002年11月17日
- 121) 山口裕之『コンディヤックの思想』『読売新聞』2002年12月1日
- 122) 「精神の一般モデルに向けて」『週刊読書人』第2466号、2002年12月13日 * 山口裕之『コンディヤックの思想』の書評
- 123) 小松美彦『対論 人は死んではならない』『読売新聞』2002年12月15日
- 124) 「2002年私のベスト3」『読売新聞』2002年12月22日
- 125) 「意識という幻：ツール・ノーレットランゲルシュ『ユーザー・イリュージョン』』『i feel』、no.23、2003年
- 126) 「2002年読書アンケート」『みすず』第502号、2003年
- 127) 「体のなかの『戦争と平和』」『週刊読書人』第2479号、2003年3月21日 * 安保徹・無能唱元『免疫学問答』の書評
- 128) 「先端技術の社会的規制に向けて：フランシス・フクヤマ『人間の終わり』』『i feel』、no.24、2003年
- 129) 「2003年上半年期3冊」『週刊読書人』第2497号、2003年
- 130) 「これは、〈思想警察〉の調書なのか？」『図書新聞』第2641号、2003年8月9日 * J・ブーヴレス『アナロジーの罫』の書評
- 131) 「独自の鮮やかさが光る」『週刊読書人』第2511号、2003年11月7日 * 重田園江『フーコーの穴』の書評
- 132) 「2003年読書アンケート」『みすず』第513号、2004年2月1日
- 133) 「調節機構の存在論」『週刊読書人』第2531号、2004年4月2日 * 金子勝・児玉龍彦『逆システム学』の書評
- 134) 「2004年上半年期3冊」『週刊読書人』第2547号、2004年7月30日
- 135) 「科学取り込む知的な音楽史」『日本経済新聞』2004年9月19日 * マス・レヴェンソン『錬金術とストラディヴァリ』の書評
- 136) 「科学哲学と社会的問題との接点を探る」『日経サイエンス』2004年10月号 * 伊勢田哲治『認識論を社会化する』の書評
- 137) 「バラケルススとその時代」『週刊読書人』第2566号、2004年12月10日 * バラケルスス『奇蹟の医の糧』の書評
- 138) 「2004年下半年期の3冊」『図書新聞』第2707号、2004年12月25日
- 139) 「2004年読書アンケート」『みすず』第524号、2005年2月1日
- 140) 「生物学的な『死への悟り』」『図書新聞』第2714号、2005年2月19日 * 池田清彦『生きる力、死ぬ能力』の書評
- 141) 「科学革命の裏方に現代の光」『日本経済新聞』2005年4月17日 * 金子務『オルデンバーグ』の書評
- 142) 「2005年上半年期3冊」『週刊読書人』第2597号、2005年7月29日
- 143) 「集団のゆっくりとした営為の中に創造的基盤を根付かせる」『週刊読書人』第2604号、2005年9月16日 * ベルトラン・ジル『ルネサンスの工学者たち』の書評
- 144) 「天才の生涯、印象深い逸話で」『日本経済新聞』2005年9月18日 * ジェイムズ・グリック『ニュートンの海』の書評
- 145) 「抗うつ剤に潜む問題」『週刊読書人』第2606号、2005年9月30日 * D・ヒーリー『抗うつ薬の功罪』の書評
- 146) 「本のカルテ：Woman 女性のからだの不思議（上・下）」『からだの科学』no.245、2005年
- 147) 「通念ゆきさぶる挑発的理論」『高知新聞』2005年12月18日他 * テイヴィッド・ムーア『遺伝子神話の崩壊』の書評
- 148) 「2005年下半年期読書アンケート」『図書新聞』第2755号、2005年12月24日
- 149) 「2005年読書アンケート」『みすず』第535号、2006年
- 150) 「製薬産業が持つ問題点とは」『週刊読書人』第2627号、2006年3月3日 * マーシャ・エンジェル『ビッグ・ファーマ』の書評

- 151) 「選別の思想を可視化せよ」『図書新聞』第2767号、2006年3月25日 * 島蘭進『いのちの始まりの生命倫理』の書評
- 152) 「19世紀科学者の想像力に感嘆」『日本経済新聞』2006年5月28日 * エドモンド・ブレア・ボウルズ『氷河期の「発見」』の書評
- 153) 「多彩な思想への巧みな案内書」『週刊読書人』第2646号、2006年7月21日
- 154) 「2006年上半年期三冊」『週刊読書人』第2647号、2006年7月28日
- 155) 「2006年上半年期読書アンケート」『図書新聞』第2784号、2006年7月29日
- 156) 「動物の進化史、想像交えたどる」『日本経済新聞』2006年8月27日 * デイヴィッド・R・ウォレス『哺乳類天国』の書評
- 157) 「島蘭進『いのちの始まりの生命倫理』書評」『宗教研究』vol.80、no.349、2006年
- 158) 「人間を惑わす色の文化・産業史」『日本経済新聞』2006年12月10日 * エイミー・B・グリーンフィールド『完璧な赤』の書評
- 159) 「2006年下半年期読書アンケート」『図書新聞』第2803号、2006年12月23日
- 160) 「進化のリズム超脱する知識世界」『日本経済新聞』2007年1月21日 * ミッシェル・セール『人類再生』の書評
- 161) 「2006年読書アンケート」『みすず』第546号、2007年
- 162) 「際どい議論を慎重に分析」『週刊読書人』第2675号、2007年2月16日 * 桜井徹『リベラル優生主義と正義』の書評
- 163) 「深い学識に裏打ちされた論述」『週刊読書人』第2691号、2007年6月8日 * 山本義隆『一六世紀文化革命』(全2巻)の書評
- 164) 「生物医学的言説空間の巧みな脱白」『図書新聞』第2827号、2007年6月30日 * 美馬達哉『〈病〉のスペクタクル』の書評
- 165) 「2007年上半年期三冊」『週刊読書人』第2698号、2007年7月27日
- 166) 「2007年上半年期読書アンケート」『図書新聞』第2831号、2007年7月28日
- 167) 「複雑な『その後』の人生に光あてる」『日本経済新聞』2007年8月26日 * カイ・バード、マーティン・シャーウィン『オッペンハイマー』上下巻の書評
- 168) 「香川知晶『死ぬ権利』書評」『フランス哲学・思想研究』第12号、2007年
- 169) 「生命という概念を軸にして文化の諸相を切り取る」『図書新聞』第2839号、2007年9月29日 * 鈴木貞美『生命観の探究』の書評
- 170) 「優れた啓蒙家、電気の歴史説く」『日本経済新聞』2007年10月7日 * D・ボダニス『エレクトリックな科学革命』の書評
- 171) 「現代文明に対する異議申し立ての可能性」『図書新聞』第2846号、2007年11月17日 * 町田宗鳳・島蘭進編『人間改造論』の書評
- 172) 「アフォーダンスを倫理学に適用」『週刊読書人』第2715号、2007年11月30日 * 河野哲也『善悪は実在するか』の書評
- 173) 「2007年下半年期読書アンケート」『図書新聞』第2851号、2007年12月22日
- 174) 「2007年読書アンケート」『みすず』第557号、2008年
- 175) 「いかした言葉の拡散過程追う」『日本経済新聞』2008年3月23日
- 176) 「よくまとまった論攷が並ぶ」『週刊読書人』第2743号、2008年6月20日
- 177) 「2008年上半年期三冊」『週刊読書人』第2748号、2008年7月25日
- 178) 「2008年上半年期読書アンケート」『図書新聞』第2880号、2008年8月2日
- 179) 「人間性の本質の不確かさ論証」『日本経済新聞』2008年9月7日
- 180) 「改めて、モダニズムの射程を問う」『週刊読書人』第2758号、2008年10月10日
- 181) 「2008年下半年期読書アンケート」『図書新聞』第2899号、2008年12月27日
- 182) 「集団的営為から広がる技術史」『日本経済新聞』、2008年12月21日
- 183) 「2008年読書アンケート」『みすず』第568号、2009年
- 184) 「良質の啓蒙書であると共に」『週刊読書人』第2781号、2009年3月27日
- 185) 「夢のあるSFの宇宙を案内」『日本経済新聞』、2009年4月26日
- 186) 「2009年上半年期読書アンケート」『図書新聞』第2927号、2009年7月25日
- 187) 「2009年上半年期三冊」『週刊読書人』第2798号、2009年7月31日

- 188) 「科学ジャーナリズムとは何か?」『週刊読書人』第2809号、2009年10月16日
- 189) 「藤川信夫著『教育における優生思想の展開』——優生思想の〈批判〉とは、何を意味するのか」『近代教育フォーラム』第18号、2009年
- 190) 「2009年下半年読書アンケート」『図書新聞』第2947号、2009年12月26日
- 191) 「2009年読書アンケート」『みすず』、no.579、2010年
- 192) 「時間の意味変える『高速社会』」『日本経済新聞』、2010年6月13日
- 193) 「2010年上半年3冊」『週刊読書人』第2848号、2010年7月23日
- 194) 「2010年上半年読書アンケート」『図書新聞』第2975号、2010年7月24日
- 195) 「『生の被贈与性』という発想」『週刊読書人』第2861号、2010年10月22日
- 196) 「科学と文化の多層的相関探る」『日本経済新聞』2010年10月31日
- 197) 「それぞれ一考に値する議論」『週刊読書人』第2868号、2010年12月10日
- 198) 「科学論内部の論争の背景探る」『日本経済新聞』、2010年12月19日
- 199) 「2010年下半年の3冊」『図書新聞』第2995号、2010年12月25日
- 200) 「2010 私の3冊」『東京新聞』2010年12月26日
- 201) 「2010年読書アンケート」『みすず』、no.590、2011年
- 202) 「古代ギリシアの『過去』問う」『日本経済新聞』、2011年3月6日
- 203) 「ポスト・フーコー期に突入した中で」『週刊読書人』第2884号、2011年4月8日
- 204) 「優れた〈科学政策の考古学〉」『図書新聞』第3009号、2011年4月9日
- 205) 「人格概念の来歴を探り、その問題点を探る箇所は読み応えがある」『図書新聞』第3014号、2011年5月21日
- 206) 「2011年上半年三冊」『週刊読書人』第2898号、2011年7月22日(207) 「2011年上半年読書アンケート」『図書新聞』第3023号、2011年7月23日
- 207) 「人工的生命と人間の違い探る」『日本経済新聞』、2011年7月31日
- 208) 「近代科学革命以前の数的世界」『日本経済新聞』、2011年10月16日
- 209) 「遺伝子中心主義に対する多方面からの懐疑」『週刊読書人』第2913号、2011年11月4日
- 210) 「2011年下半年の3冊」『図書新聞』第3043号、2011年12月24日
- 211) 「〈異論〉に異論あり!」『週刊読書人』第2921号、2012年1月6日
- 212) 「2011年読書アンケート」『みすず』第601号、2012年
- 213) 「〈動物靈魂論〉の最終相を刻む」『図書新聞』第3048号、2012年2月4日
- 214) 「明確な〈脱原発〉に向けて——市田良彦氏の反論に応答して」『週刊読書人』第2926号、2012年2月10日
- 215) 「個別の技術的伝統にみる文化史」『日本経済新聞』2012年4月22日
- 216) 「近代における〈警戒的人間観〉の発露」『週刊読書人』第2938号、2012年5月11日
- 217) 「陸海軍と科学者の関係浮き彫りに」『日本経済新聞』2012年6月24日
- 218) 「2012年上半年読書アンケート」『図書新聞』第3071号、2012年7月21日
- 219) 「2012年上半年三冊」『週刊読書人』第2949号、2012年7月27日
- 220) 「ベルクソンを介して、フロイトに沈潜する」『週刊読書人』第2953号、2012年8月24日
- 221) 「技術の進展を軸に未来を予想」『日本経済新聞』2012年11月11日
- 222) 「〈科学批判〉の命脈の再評価のために」『図書新聞』第3088号、2012年12月1日
- 223) 「2012年下半年読書アンケート」『図書新聞』第3091号、2012年12月22日
- 224) 「2012年読書アンケート」『みすず』第611号、2013年
- 225) 「情報概念の歴史と現代の状況」『日本経済新聞』、2013年3月10日
- 226) 「生命軽視のエートスと、科学者の加担」『週刊読書人』第2984号、2013年4月5日
- 227) 「『实在』をめぐる物理学者の論争」『日本経済新聞』、2013年5月5日
- 228) 「2013年上半年読書アンケート」『図書新聞』第3119号、2013年7月20日
- 229) 「2013年上半年三冊」『週刊読書人』第2999号、2013年7月26日
- 230) 「包括的な理想社会論」『週刊読書人』第3008号、

2013年9月27日

- 231) 「巨大な加速器への期待感示す」『日本経済新聞』、2013年12月15日
- 232) 「2013年下半年読書アンケート」『図書新聞』第3139号、2013年12月21日
- 233) 「2013年読書アンケート」『みすず』第623号、2014年、
- 234) 「『可愛い』動物が映す人類の未来」『日本経済新聞』2014年3月2日
- 235) 「超越性の忘却がもたらす破滅の道」『週刊読書人』第3030号、2014年3月7日
- 236) 「加速する技術で進化する人と社会」『日本経済新聞』2014年3月30日
- 237) 「知的興奮誘う『ヒト族』の消長」『日本経済新聞』2014年5月11日
- 238) 「ヒヒ研究から描くアフリカ社会」『日本経済新聞』2014年6月22日
- 239) 「ラインの変幻自在性」『週刊読書人』第3046号、2014年7月4日
- 240) 「2014年上半年読書アンケート」『図書新聞』第3167号、2014年7月19日
- 241) 「2014年上半年三冊」『週刊読書人』第3049号、2014年7月25日
- 242) 「『企業』として生きる宇宙論の天才」『日本経済新聞』2014年7月27日
- 243) 「変わり続ける王のイメージ」『日本経済新聞』2014年10月19日
- 244) 「2014年下半年読書アンケート」『図書新聞』第3187号、2014年12月20日
- 245) 「進化生物学で解く人間の利他性」『日本経済新聞』2015年1月4日
- 246) 「2014年読書アンケート」『みすず』第634号、2015年
- 247) 「2015年上半年読書アンケート」『図書新聞』第

3215号、2015年7月18日

- 248) 「2015年上半年三冊」『週刊読書人』第3099号、2015年7月24日
- 249) 「『監獄の誕生』論を大きく超えるフーコー論」『図書新聞』第3229号、2015年11月7日
- 250) 「多くの職が奪われる未来を考察」『日本経済新聞』2015年12月6日
- 251) 「2015年読書アンケート」『みすず』第645号、2016年

金森修先生大学院ゼミ課題

- 2005年度 : 遺伝子もたらす文化的・哲学的・倫理的問題群
- 2006年度 : ユートピア/ディストピア論
- 2007年度 : フーコー『安全性・領土・人口』
- 2008年度 : フランスの教育哲学
- 2009年度夏: 知識論・学問論の古典をめぐる初歩的な文献案内ならびに読解の訓練
- 2009年度冬: デューイ『経験としての芸術』
- 2010年度 : フーコー『主体の解釈学』
- 2011年度 : ゴシック小説
- 2012年度 : 大学の思想史
- 2013年度 : カッシーラー『認識問題』
- 2014年度 : デューイ『経験としての芸術』
- 2015年度 : シュスターマン『プラグマティズムと哲学の実践』、*Thinking through the Body: Essays in Somaesthetics*.
- 2016年度 : シュスターマン (前年度から継続)

以上の資料は「金森修のホームページ」(<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~waskana/> 最終アクセス2017年5月7日)をもとに稲田祐貴が作成したものである。